

跡 跡 跡 跡
遺 磐 磐 磐
入 入 入 入
ヶ ケ ケ ケ
地 地 地 地
石 石 石 石
遺 遺 遺 遺
沢 沢 沢 沢
房 房 房 房
遺 遺 遺 遺
駒 駒 駒 駒
込 込 込 込
西 西 西 西
跡 跡 跡 跡

県単地方道路交付金事業（下仁田浅科線佐久市駒込）
関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ

2006. 3

佐久建設事務所
佐久市教育委員会

地ヶ入遺跡
地ヶ入磐跡
畠石遺跡
午房沢遺跡
西駒込遺跡

県単地方道路交付金事業（下仁田浅科線佐久市駒込）
関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ

2006. 3

佐久建設事務所
佐久市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成9・11・13・17年に発掘調査した佐久市志賀に所在する地ヶ入遺跡・地ヶ入砦跡、地ヶ入砦跡、景石遺跡、午房沢遺跡、西駒込遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、佐久建設事務所が行う県単（緊急）地方道路交付金（整備）事業（下仁田浅科線佐久市駒込）に伴い、佐久建設事務所の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。

3. 発掘調査地図は、以下の通りである。

地ヶ入遺跡　長野県佐久市志賀1873-1,1875,1881,1882,1883-1・3

地ヶ入砦跡　長野県佐久市志賀1859-1,1861,1855-1・3・6,1860,1871

地ヶ入遺跡II　長野県佐久市志賀1856-1・2

景石遺跡　長野県佐久市志賀1759-1

午房沢遺跡　長野県佐久市志賀1420-1・2

西駒込遺跡　長野県佐久市志賀1324-3

4. 調査期間は、以下の通りである。

地ヶ入遺跡・地ヶ入砦跡　平成9年4月24日～10月21日

地ヶ入遺跡II　平成9年8月28日～10月20日

景石遺跡　平成11年8月3日～9月3日

午房沢遺跡　平成13年5月29日～6月2日

西駒込遺跡　平成17年6月13日～17日

報告書作成　平成16年7月20日～同17年2月28日・平成17年6月6日～同18年3月24日

5. 発掘調査面積は、以下の通りである。

地ヶ入遺跡　約2,820m²　地ヶ入砦跡　約4,400m²　地ヶ入遺跡II　3,880m²

景石遺跡　約5,000m²　午房沢遺跡　660m²　西駒込遺跡　430m²

6. 発掘調査の組織は、以下の通りである。なお、平成17年度から市町村合併により組織が再編された。

発掘調査受託者　佐久市教育委員会

教育長　依田英夫（平成13年6月退任）　高柳　勉（平成13年7月就任・平成17年4月退任）

三石昌彦（平成17年5月就任）

事務局

教育次長　市川　源（平成9年度）　小林宏造（平成11年度）　黒沢俊彦（平成13年度）

赤羽根寿文（平成16年度）　柳沢健一（平成17年度）

文化財課長　須江仁龍（平成9年度）　草間芳行（平成11・13年度）　小林正衛（平成16年度）

中山　悟（平成17年度）

文化財係長　大塚達夫（平成9年度）　荻原一馬（平成11年度）　森角吉晴（平成13年度）

高村博文（平成16年度）

文化財係　林　幸彦、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也、富沢一明、上原　学、（平成9・11・13・16年度）

三石宗一（平成9年度）　出澤　力（平成11・13・16年度）　山本秀典（平成11・13年度）

赤羽根太郎（平成16年度）

管理係長　櫻沢　麗子（平成9年度）

文化財調査係長　高柳正人

文化財調査係　林　幸彦、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也、富沢一明

上原　学、出澤　力、赤羽根太郎、神津　格

文化財保護係長　高村博文

文化財保護係　荻原留美

調査担当者　地ヶ入遺跡・地ヶ入砦跡　羽毛田卓也　地ヶ入遺跡II　林　幸彦

景石遺跡　小林眞寿、出澤　力　午房沢遺跡・西駒込遺跡　須藤隆司

7. 発掘調査は、文化財課の調査員、地元志賀駒込区の皆様をはじめ多数の方の協力を得て実施した。

8. 本書の執筆は第II章を羽毛田卓也が行い、その他の執筆・編集を須藤隆司が行った。

9. 出土遺物および調査に関する記録類は一括して、佐久市教育委員会文化財課に保管してある。

凡　例

I 地ヶ入遺跡・地ヶ入骨跡

- 1 遺跡の略称 地ヶ入遺跡 → SC
地ヶ入骨跡 → SCT
- 2 遺構の略称 竪穴状遺構 → Ta 土坑 → D
柱穴址 → P 火葬壙 → OT
- 3 遺構・遺物の縮尺は各図中にスケールを付したので参照されたい。
- 4 本文・表・図版等の番号(例12-3)は挿図番号(例第12図3番)と対応する。
- 5 ピット付近のー数値は、確認面から底部までの深度を表す。
- 6 遺物の番号は土製品・石製品とともに通し番号である。
- 7 土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修1987年度版『新版標準土色帖』の表示に基づいた。
- 8 写真図版中の遺物の縮尺はその都度明記した。
- 9 土層説明中の粒子直徑は日本共通の「堆積物粒径分類」によった。

名称	礫・バミス				砂			泥	
	巨礫	大礫	中礫	細礫	粗礫	中礫	細礫	シルト	粘土
直徑 (mm)	256 以上	256~64	64~4	4~2	2~0.5	0.5~ 0.25	0.25~ 62/1000	62/1000 ~4/1000	4/1000 以下

II 地ヶ入遺跡Ⅱ・疊石遺跡・牛房沢遺跡・西駒込遺跡

1. 遺跡の略称 地ヶ入遺跡 → SC 疊石遺跡 → SKT 牛房沢遺跡 → SGB 西駒込遺跡 → SKNK
2. 遺構の略称 竪穴住居址 → H 特殊遺構 → Tc 竪穴状遺構 → Ta
土坑 → D 柱穴址 → P 溝址 → M
3. 遺構の縮尺は、竪穴住居址・竪穴状遺構が1/80、特殊遺構・土坑が1/60、カマド・埋甕が1/40である。
遺物の縮尺は、土器・編み物石・砥石が1/4、石器の石器2/3、削器・剥片・石核・穿孔のある砥石1/2、
打製石斧1/3である。なお、各図中にスケールを付したので確認されたい。
4. 遺物写真的縮尺は、概ね挿図の縮尺と同じである。
5. 本文・表・図版等の番号は挿図番号と対応する。
6. 土器・石器計測一覧表の単位はmm, gである。*は破損後の現存値で、土器の△は推定値である。
7. 土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修1987年度版『新版標準土色帖』の表示に基づいた。

目 次

例言
凡例
目次

I 発掘調査の経緯	1
II 地ヶ入遺跡・地ヶ入砦跡の調査	3
1 調査の概要	3
2 地ヶ入砦跡	4
3 地ヶ入遺跡	8
1) 壓穴状遺構	8
2) 土坑・火葬墓	11
3) ピット群	12
III 地ヶ入遺跡Ⅱの調査	35
1 調査の概要	35
2 遺構と遺物	36
1) H1号住居址 2) H2号住居址	36
3) H3号住居址	44
4) 1号特殊造構 5) 1号壓穴状遺構 6) 1号土坑	47
7) 墓壙 8) 縄文時代の土器と石器	49
IV 叠石遺跡の調査	52
1 調査の概要	52
2 遺構と遺物	52
1) H1号住居址	52
2) H2号住居址	53
3) 1号土坑 4) 1号ピット 5) 溝址	53
V 午房沢遺跡の調査	56
1 調査の概要	56
2 縄文時代の遺物	56
VI 西駒込遺跡の調査	58
1 調査の概要	58
2 縄文時代の遺物	58

報 告 書 抄 訳

ふりがな	ちげいりいせき ちげいりとりあと たたみいしいせき ごぼうざわいせき にしこまごめいせき
書名	地ヶ入遺跡 地ヶ入砦跡 骨石遺跡 牛房沢遺跡 西駒込遺跡
別書名	県単地方道路交付金事業（浅科下仁田幕佐久市駒込）開発道路発掘調査報告書II
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第137集
編集者名	須藤隆司
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2006年3月24日
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
ふりがな	ちげいりいせき ちげいりとりあと たたみいしいせき ごぼうざわいせき にしこまごめいせき
遺跡名	地ヶ入遺跡 地ヶ入砦跡 疊石遺跡 牛房沢遺跡 西駒込遺跡
ふりがな	ながのけんさくしが
遺跡所在地	長野県佐久市志賀
市町村コード	20217
遺跡番号	174・176・179・180
北緯	36° 14' 5"
東経	139° 53' 4"
調査機関	平成8年12月18日～平成17年6月17日
種別	集落址 砕跡 敷布地
主な時代	绳文時代 平安時代 中世
遺跡概要	中世堅穴状遺構7棟、中世の土坑・火葬墓9基、平安時代の堅穴住居址5軒。 縄文時代早期・前期・中期の土器・石器、「駒込真岩」

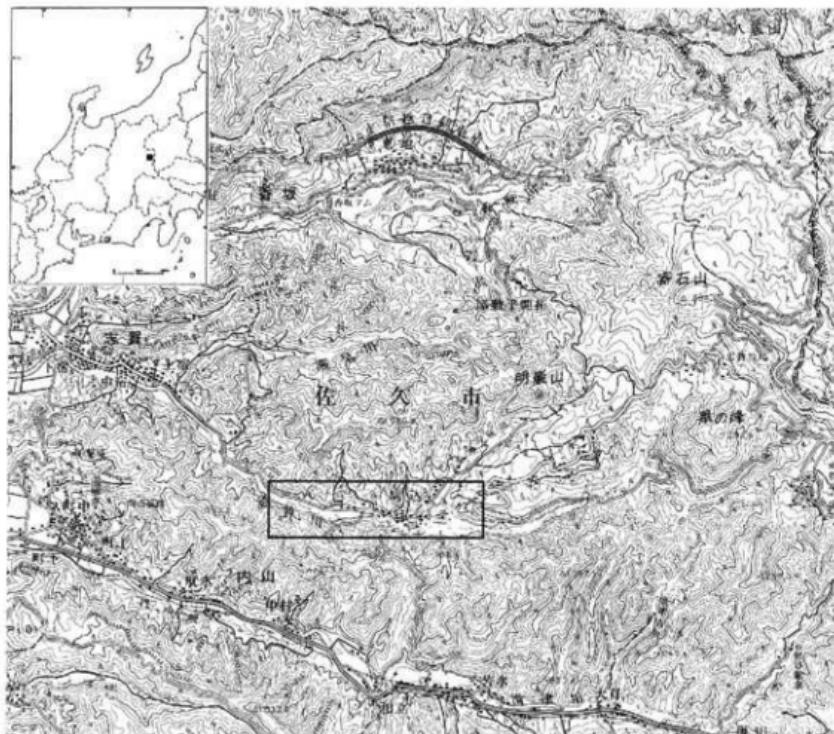
I 発掘調査の経緯

地ヶ入遺跡、地ヶ入皆跡、地ヶ入遺跡Ⅱ、疊石遺跡、牛房沢遺跡、西駒込遺跡は、関東山地北西部に位置する佐久市志賀駒込地方に存在する。駒込地方は佐久市東部山地と呼ばれる山間地で、東西に滑津川に合流し千曲川にそそぐ志賀川上流域の流れがある。各遺跡は、志賀川の北側に連なる山麓緩斜面や谷部、尾根上緩斜面などに立地する。

今回、佐久建設事務所が佐久市志賀駒込を主体とする緊急（県単）地方道路整備（交付金）事業（下仁田浅科佐久市駒込）を上記遺跡群の範囲に計画したため、道路建設予定地を対象に随時試掘調査を実施し、遺跡の存在が確実に判明した場合は、記録保存のための発掘調査を行う運びとなった。

試掘調査は工事進行に合わせて、平成8年12月18日の地ヶ入遺跡をはじめに、平成17年6月13日の西駒込遺跡までの長期間に及んで実施された。その間で遺構・遺物が確認されたため、佐久建設事務所の委託を受けた佐久市教育委員会が発掘調査を実施した遺跡が上記の遺跡群である。

各遺跡の調査年度は、地ヶ入遺跡、地ヶ入皆跡、地ヶ入遺跡Ⅱが平成9年度、疊石遺跡が平成11年度、牛房沢遺跡が平成13年度、西駒込遺跡が平成17年度である。また、平成12年9月の試掘調査で、新たに旧石器時代の遺跡である天神小根遺跡が発見され、同年と平成13年に発掘調査を実施している（なお、上の木戸遺跡の試掘調査で旧石器時代の石核1点が検出されている）。天神小根遺跡（上の木戸遺跡）の報告は、『佐久市埋蔵文化財調査報告書第136集県単地方道路交付金事業（下仁田浅科線佐久市駒込）関連遺跡発掘報告書』を参照して頂きたい。



第1図 調査遺跡の位置 (1 : 50,000)



第2回 調査・周辺道路の地形 (1 : 5,000 地図が調査対象地)

II 地ヶ入遺跡・地ヶ入砦跡の調査

1 調査の概要

所在地 佐久市志賀
調査委託者 佐久建設事務所
開発事業名 緊急地方道路整備事業
調査期間 平成9年4月24日～
平成9年10月21日（現場）
調査面積 7,220m²
調査担当者 羽毛田卓也



第3図 地ヶ入遺跡・地ヶ入砦跡位置図 (1 : 50,000)

立地と環境

地ヶ入遺跡は志賀地籍駒込集落入口に位置し、志賀川によって形成された志賀山系末端の標高784m内外を測る微高地に広がる。微高地は志賀川に向かって緩やかに傾斜する。一方地ヶ入砦は志賀川を南に臨む志賀山系の小規模な丘陵のひとつである。志賀溶結凝灰岩を主体とする標高784mから807mを測る円錐状の独立丘陵で、北側で志賀山系に接続している。

地ヶ入砦の北側には、笠原城が展開しており、本砦址を含め、南側に皆砦を展開している。中世の小集落を検出した地ヶ入遺跡に接した北側もこうした砦群のひとつで、岩を削った階段や曲輪が残存している。本砦址を北側に登ると笠原城に到達する。

本遺跡と平行して東西に走る道路は、群馬県の下仁田と佐久を結ぶ古道で、近世には米を始めとする物資を運ぶ重要な路線のひとつであった。また東側の駒込集落には、古代の牧があったという伝承がの残されており、現在では否定的にはなったが、平安時代の信濃16御牧のひとつである「猪鹿牧」を「しがまき」と読み、この地にあてた研究者もいる。

調査の概要

今回調査対象地は地形等により、地ヶ入遺跡を a・b・c の三つに分割して調査を行った。その内、重機による表土除去作業を行ったのは c 地点のみで、他はすべて手作業により構造確認面を表出させた。一部を除き耕作放棄された畠地と森林で、桑と低灌木と低木に覆われていた。まず低灌木類の伐採と除去作業を行い、トレーニングを設定し掘り下げを行った。またそれと併行して、法面の表出作業と表土除去作業を行った。トレーニング確認作業により、b 地点から若干の土師質土器と焼骨を確認したため、トレーニングを広げた結果、中世の堅穴状造構と、中世と推測される火葬墓を検出した。さらにも b 地点南端の石垣から巨石に「駒込」と刻まれた道標と江戸後期（弘化4年、1847年）の年号の刻まれた石造馬頭親世音を検出し、石垣南直下からは旧道が通過していた痕跡である轍跡を志賀溶結凝灰岩の岩盤から検出した。詳細については写真を参照されたい。c 地点は比較的広範囲な平坦面であったため、重機を導入して全面の表土を除去した。その結果中世の堅穴状建物址と土坑・柱穴址を検出した。

地ヶ入砦跡は、当初調査予定にはなかったが、高木の伐採後、帶曲輪伏の平坦面が観察されたため調査を行うこととなった。重機を導入すると、曲輪平坦面が破壊される懸念が生じたため、低木の伐採と、表面の精査を手作業で行った。精査作業により、土師質土器と内耳土器が検出され、頂上の平坦面南側の大岩の陰から五輪塔の地輪部3個と火葬骨を検出した。それらと曲輪状平坦面などから、直下に小集落（c 地点）を持つ「地ヶ入砦跡」として調査を進めた。

2 地ヶ入砦跡

地ヶ入砦跡は、志賀山系より連続する丘陵の一部で、そこより張り出した独立丘陵を利用し、山頂より裾野に向て連続する段曲輪が存在する。裾野と山頂部の比高差は西側で22.8mを測る。頂部の平坦面は2.4m×3.4mの楕円形を呈し、巨石により周囲を囲まれ、最高標高は806.6mを測る。丘陵は志賀溶結凝灰岩を主体とし、地山はローム由来する褐色粘土と、凝灰質粗砂からなる。頂上から裾野にかけて小規模な段曲輪が交互に連続する。東側と西側の間に沢が現存し、堀の機能を兼ねていたものと推定される。南側は現在道路となっているが堀の存在が推定される。また北側は尾根となっているが、かつて溝があったと伝わっている。

検出した段曲輪は岩体を避け、或いは岩体の平坦面を利用していている。頂上平坦面および段曲輪群からは、内耳土器破片と土師質土器破片が検出されたが、施設に関係する柱列や檻列を検出することはできなかった。頂上平坦面の北側端では、搬入土砂礫が確認されたが、雨水による二次堆積で、頂上平坦部を作成したものが流れたものと推測される。人頭大の河原石も何点か確認されたが、頂上平坦部法面の補強に使用されたものが土砂とともに崩落したものと推定される。段曲輪は原則として地山を削り平坦面を造り出しているが、段曲輪の法面に眼下の志賀川の河床礫(30cm~3cm大)を使用している部分も見られ、土砂を搬入して段曲輪を作成したことがうかがえる。東側の裾野に近い部分では中程度の規模の段曲輪が数段確認されたが、耕作地として利用され、造作が加わっており、遺物は数点出土したものの施設の検出はできなかった。北側の平坦地は、尾根状に北側の山体に続いている部分を、戦後まもなく耕作のため削平したとされており、不自然な平坦地を形成している。若北側直下には身の丈程の堀跡が存在していたということで、その底面まで削平したということである。そこで削平した粘土質の土砂は、南側に広がる水田が砂地であったため運んで利用したようである。また山頂部には石の祠があったそうだが、見つけることはできなかった。地ヶ入遺跡西端の岩の上に道祖神とされている石の祠があるが、これが山頂部にあった祠の可能性がある。

山頂部を南西にやや下った二つの巨石の陰の段曲輪(標高801.2m)から、曲輪精査中に3基の凝灰岩製の五輪塔の地輪部が検出された。この3基の地輪部の下からは若干の焼骨が検出され、地輪が設置当初より大きく移動していないことがわかった。なおこの地輪に対応するであろう他の部材は検出できなかった。地輪を取り除いた下部は、木の根と小動物による擾乱が著しく、明確な掘り込みは確認できなかったが、骨の散布範囲として3個の堆みを確認した。おそらく掘り込みは浅く、規模も小さかったと想像される。石質はいずれも凝灰岩で形態は扁平な方形を呈する。2基は凝灰角礫集塊岩に近く、風化により角が丸みを帯びている。残る1基は多孔質な凝灰岩である。3基とも佐久地方では産出しない未確認の石材である。

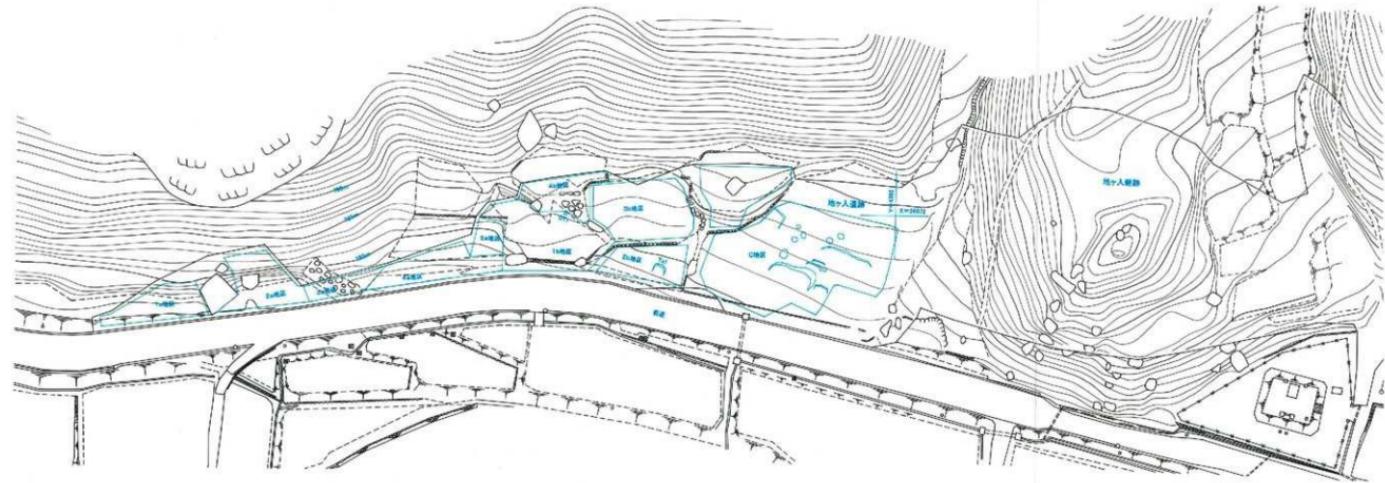
地ヶ入砦は小規模な砦であるが、志賀側からは第3の砦であり、ここが落ちると駆込の集落へ敵が容易に入れるところになる。駆込集落の北側には笠原城の出曲輪的な二つの支城があるのみである。地ヶ入砦の西方には二つの砦が存在し、都合駆込集落への他者の侵入を防いでいる。地形的にも砦群のある場所は、志賀と駆込間で急峻な山が志賀川に迫り、一番狭い場所となっている。地ヶ入砦は北側の尾根を登ると笠原城本体へ行くことができるが、本格的に造成された砦とは考えられず、短期臨時に造られた砦と考えられる。武田軍と笠原軍との戦いにその役目を果たしたかどうかは不明であり、断定はできないが、検出された砦西側の集落の営まれた時期を16世紀以降とすれば、その集落の人々の担っていた役目との関係がうかがえそうだ。



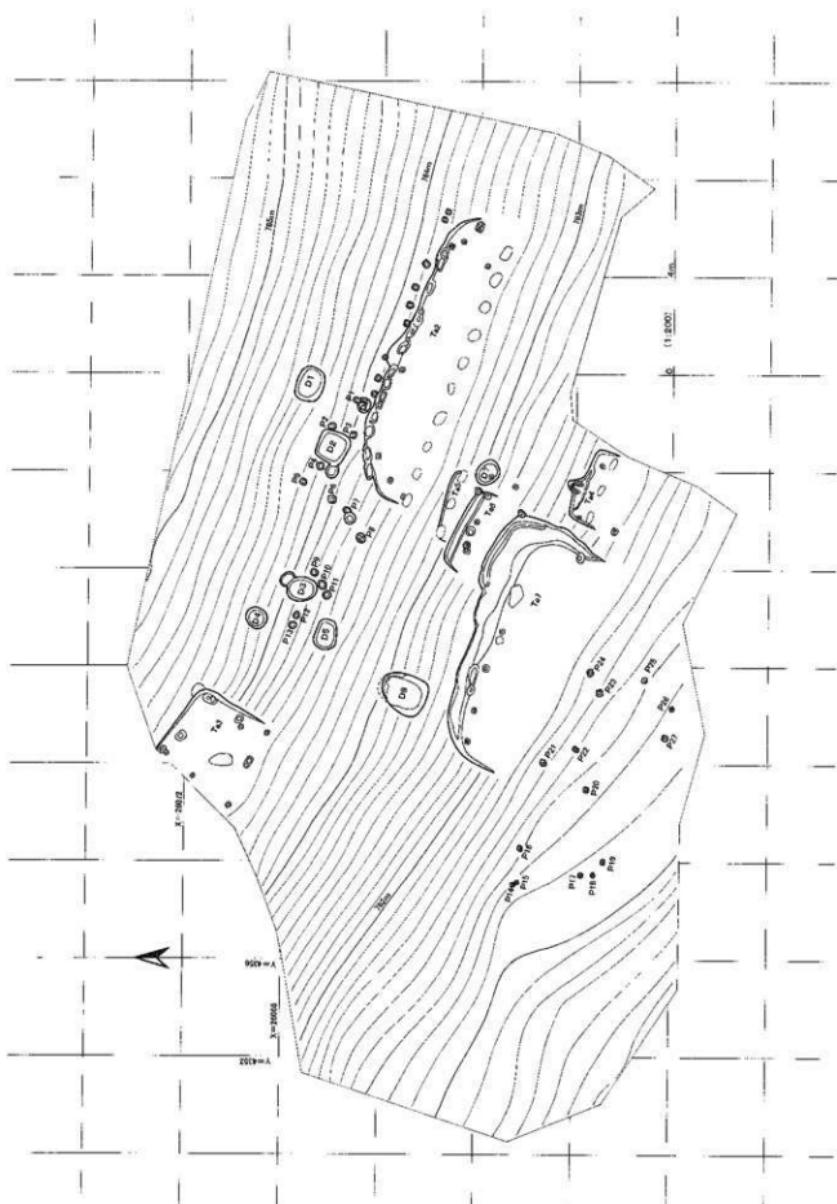
写真1 上空南方より 砦跡から遠方浅間山



写真2 上空南方より 砦跡の後方尾根群が笠原城跡



第4図 地ヶ入遺跡・地ヶ入岩跡全体図・調査区設定図



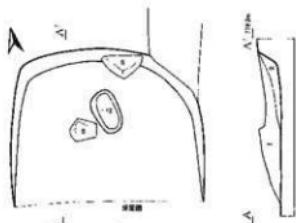
第5図 地ヶ入遺跡c地区全体図 (1:200)

3 地ヶ入遺跡

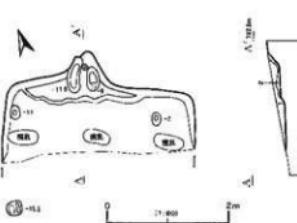
1) 穴状遺構

第1号堅穴状遺構 (Ta1)

第1号堅穴状遺構は、b地区の南側で検出された。東西壁の一部と北壁が残存し、南壁は確認できなかった。床面も東西壁消滅点までは確認できた。規模は床面が東西3.8mで、南北で検出長で2.3mを測る。床はほぼ水平で固く締まっていた。中央北壁寄りに浅い楕円形のくぼみを検出したが、焼土等が確認されず、炉の可能性は低い。北側壁面の石は地山の石で瓦石の隣である。遺物は内耳土器の破片が川土しており、中世が所産期と考えられる。



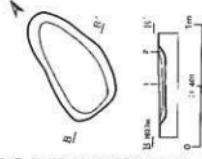
第1図 第1号堅穴状遺構平面図
第2図 第1号堅穴状遺構断面図



第4図 第4号堅穴状遺構
第5図 第4号堅穴状遺構断面図



第2図 第2号堅穴状遺構
第3図 第2号堅穴状遺構断面図



第3図 第3号堅穴状遺構
第4図 第3号堅穴状遺構断面図

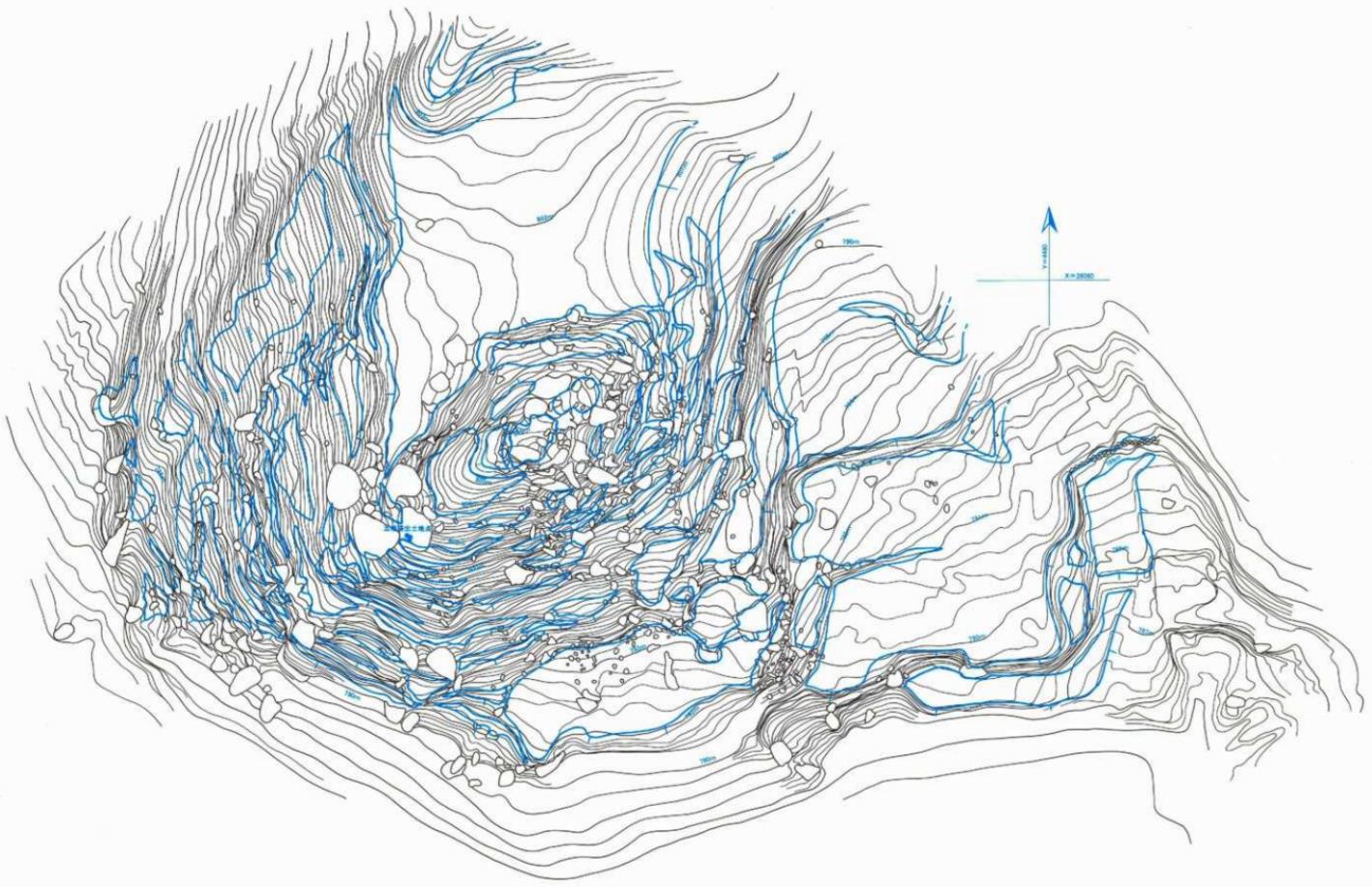
第9図 第3号堅穴状遺構断面図

第2号堅穴状遺構 (Ta2)

第2号堅穴状遺構は、c地区の中央東側で検出された。北壁と北側東西コーナーが残存し、北壁で崩落を免れた石積みが検出された。規模は床面で東西11.82mを測る。柱穴は床面で8基、北側の壁外に9基を確認した。床はほぼ水平で固く締まっていた。石積みに使用した石はすべて溶結凝灰岩で、最下部は北側の壁直下を掘りくぼめて固定している。遺物は16世紀以降と考えられる上層質土器小片と内耳土器破片、編物石等が出土した。

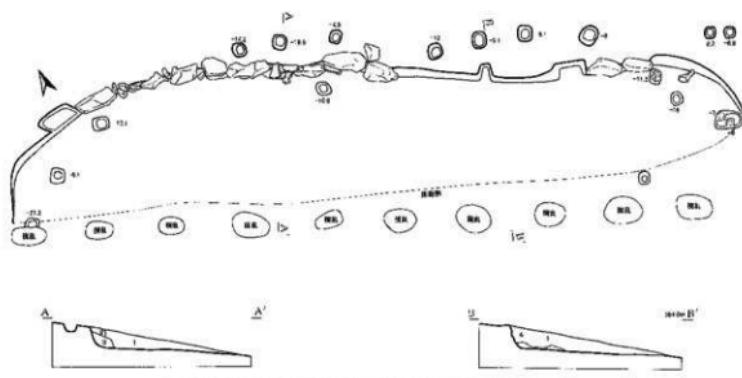
第3号堅穴状遺構 (Ta3)

第3号堅穴状遺構は、c地区の北西端で検出された。東西壁の一部と南壁は残存していなかった。東側は巨石を壁として利用していた。規模は床面で東西3.95m、南北現況で3.06mを測る。床はほぼ水平で固く締まっている。

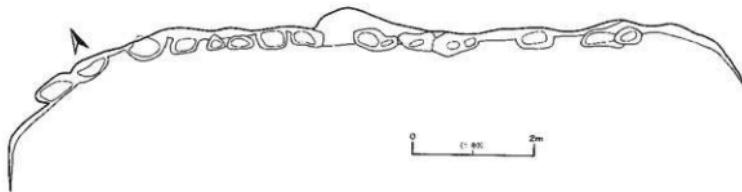


河床・堆積物調査図 (1:200)

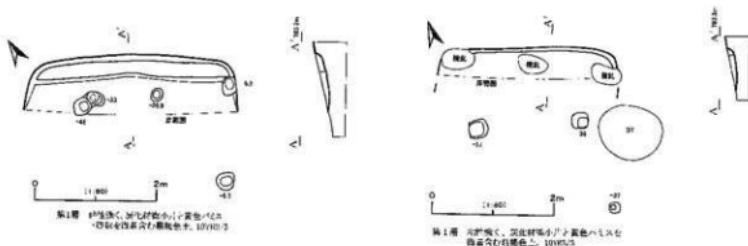
ところが火を受けており、床直上より焼土や炭化材・炭化物が確認されていることから、焼失したものと推測できる。炉は床の中央付近で検出された。不整な橢円形で、底面は焼土が堆積していた。柱穴はいずれも深く、壁際を中心には9基を検出した。遺物は16世紀以降と考えられる上部質土器小片と内耳土器破片が出土した。図中◆印の部分には用途不明な凝灰質砂岩の扁平な小石が並べられていた。



第9図 第2号堅穴状遺構実測図
第1番 鋼鉄鋸、腰袋の白・黒三バイン、陶瓦底板小片等を含む灰・土・灰瓦等。1982/3
第2番 鉄鋸、鋸刃部に鉛西小石を含む灰・土・灰瓦等。1982/3
第3番 鉄鋸部、陶瓦底板小片を含む灰・土・灰瓦等。1982/3
第4番 鉄鋸部、灰化材等小片を含む、灰・土・黃色・白・灰色等の破片等。1982/2



第10図 第2号堅穴状遺構実測図



第11図 第6号堅穴状遺構実測図

第12図 第5号堅穴状遺構実測図

第4号竖穴状遺構 (Ta4)

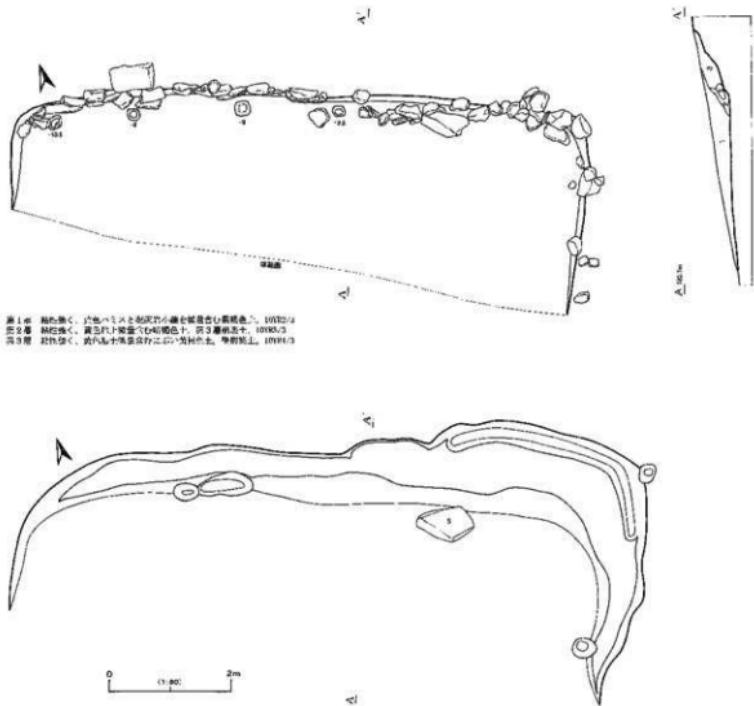
第4号竪穴造構は、c地区の中央南東部で検出された。北壁と東西壁の一部が残存し、北壁中央にカマド状の突出部をもつ。規模は東西床面で3.02mを測る。床面はほぼ水平で広く縮まっているが、雨水により流れ込んだ土砂に覆われていた。柱穴は2基が確認された。北壁に接した床面でテラグが確認され、カマド状の突出部と一緒にしている。カマド状の施設は、焼土や土構築材が残存しておらず、カマドとは断定できないが、残存する形状からカマドの可能性が考えられる。遺物は16世紀以前と考えられる内耳上器破片が出土した。

第5号豎穴状遺構 (Ta5)

第5号竪穴状構造は、c地区中央南東寄りで検出された。第6号竪穴状構造と重複関係にあるが新旧関係は不明である。北壁と東西壁の一部が残存し、北壁直下にテラスを設けている。規模は東西床面で3.42mを測る。床面はほぼ水平で固く締まっていた。柱穴は5基が検出された。遺物は内耳土器破片が出土した。

第6号豎穴状遺構 (Ta6)

第6号竪穴状造構は、c地区中央南東寄りで検出された。第5号竪穴状造構・第7号土坑と重複関係にあるが新旧関係は不明である。北壁と東壁の一部が残存し、規模は東西床向で2.84mを測る。床面はほぼ水平で固く締まり、柱穴2基が検出された。遺物は内耳上器破片、内面黒色の土師器等などが出土した。

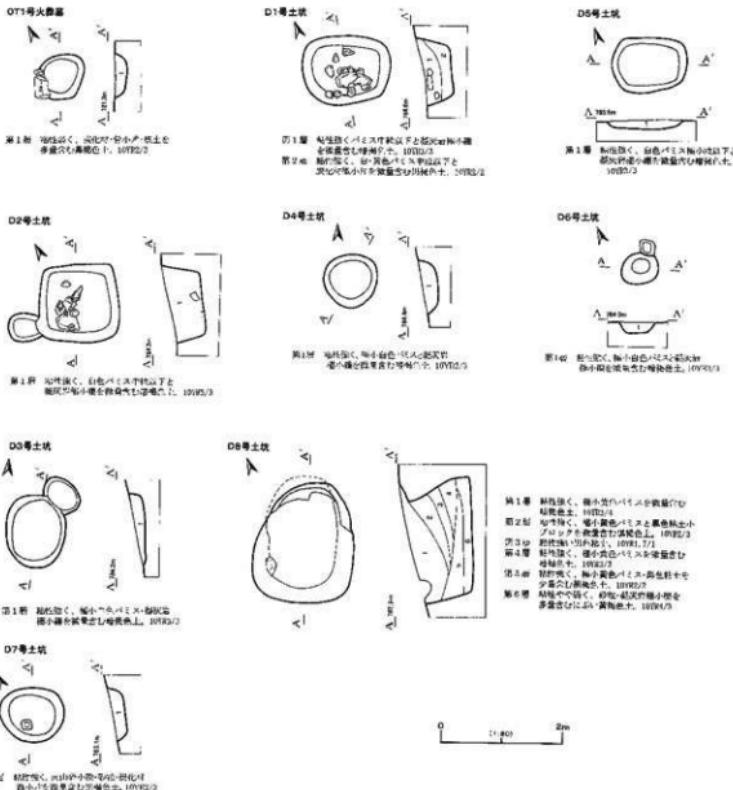


第13圖 第7号堅穴狀遺物実測図

第7号竪穴状遺構 (Ta7)

第7号竪穴状遺構は、c地区中央やや南寄りで検出された。北壁と東西壁の一部が残存し、規模は東西床面で9.24mを測る。床面はほぼ水平で固く継まり、柱穴1基が検出された。北壁では溶結凝灰岩を使用した石積みを確認した。石積みの一端は床面に崩落した状態で確認され、根石と2段目が良好な状態で残存していた。遺物は軸物石・低石、16世紀以降と考えられる内耳土器破片が出上した。

2) 土坑・火葬墓



第14図 土坑・火葬墓実測図

第1号土坑 (D1)

第1号土坑はc地区中央北寄りで検出された。規模は112×145cmを測り、形態は東西に長い楕円形を呈する。床面はほぼ水平で固く継まっていた。床面よりやや浮いた状態で溶結凝灰岩の礫群が確認された。遺物は内耳土器破片と多目的石器が出土した。

第2号土坑 (D2)

第2号土坑はc地区中央北寄りで検出された。規模は125×130を測り、形態は方形を呈する。床面よりやや浮いた上体で溶結凝灰岩の蝶群が確認された。床面は南に向かって傾斜し、固く締まっていた。遺物は土師質土器と内耳土器破片などが出土した。

第3号土坑 (D3)

第3号土坑はc地区中央北寄りで検出された。規模は117×98cmを測り、形態は南北に長い楕円形を呈する。床面は水平で固く締まっていた。

第4号土坑 (D4)

第4号土坑はc地区中央北寄りで検出された。規模は径88cm内外を測り、形態は円形を呈する。床面はやや中央が低くなり、固く締まっていた。

第5号土坑 (D5)

第5号土坑はc地区中央で検出された。規模は124×79cmを測り、形態は東西に長い楕円形を呈する。床面は中央がやや低くなり、固く締まっていた。遺物は多目的石器などが出土した。

第6号土坑 (D6)

第6号土坑はc地区中央北西寄りで検出された。規模は60×48cmを測り、形態は東西にやや長い楕円形を呈する。床面は水平で固く締まっていた。

第7号土坑 (D7)

第7号土坑はc地区中央西寄りで検出された。第5号堅穴状遺構と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。床面よりピットが検出されたが、第5号堅穴状遺構の柱穴の可能性もある。規模は105×87cmを測り、形態は東西に長い楕円形を呈する。床面は固く締まりフラットであるが南に向かって傾斜する。

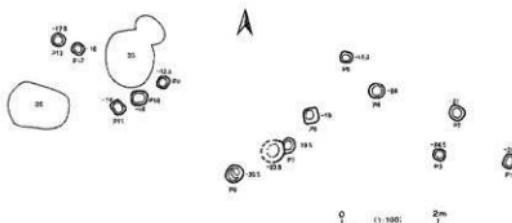
第8号土坑 (D8)

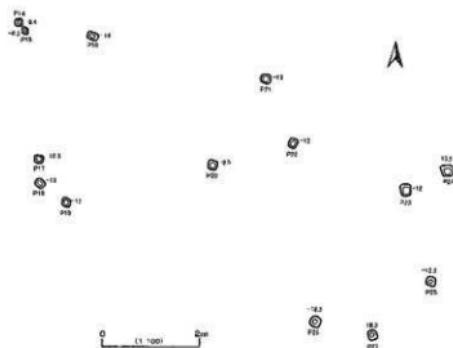
第8号土坑はc地区中央部で検出された。規模は208×163cmを測り、形態は南北に長い楕円形を呈する。北側が袋状となっており、覆土第2から4層は北側天井部の崩落土と考えられる。床面は水平で固く締まっていた。床面上には炭化材微小片と草木類を主とする炭化物が確認され、貯蔵用として使用されていた可能性がある。遺物は16世紀以降と考えられる内耳土器破片が出土した。

第1号火葬墓 (OT 1)

第1号火葬墓はb地区の中央北端の溶結凝灰岩の岩盤塗から検出された。規模は径80cm内外を測り形態は円形を呈する。墓内からは多量の炭化材と少量の骨片が出土した。壁面がわずかに火熱を受けており、この場所で火葬されたものと考えられる。副葬品はなく、付近の状況から鑑みて中世が所産期と考えられる。

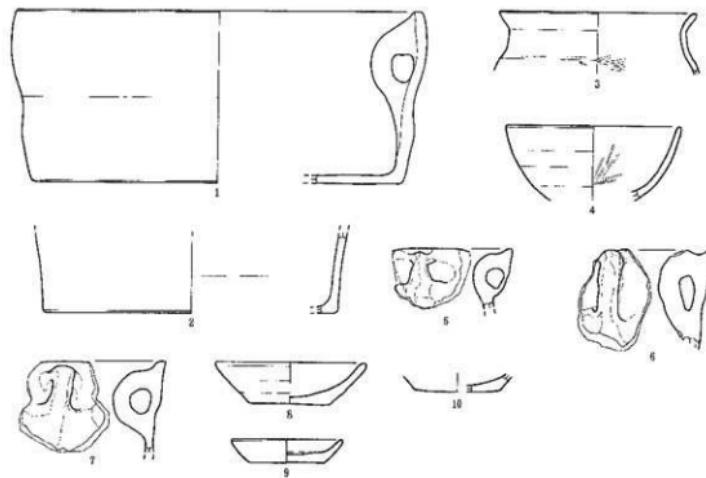
3) ピット群 (P1~P27)





第16図 ピット群実測図（2）

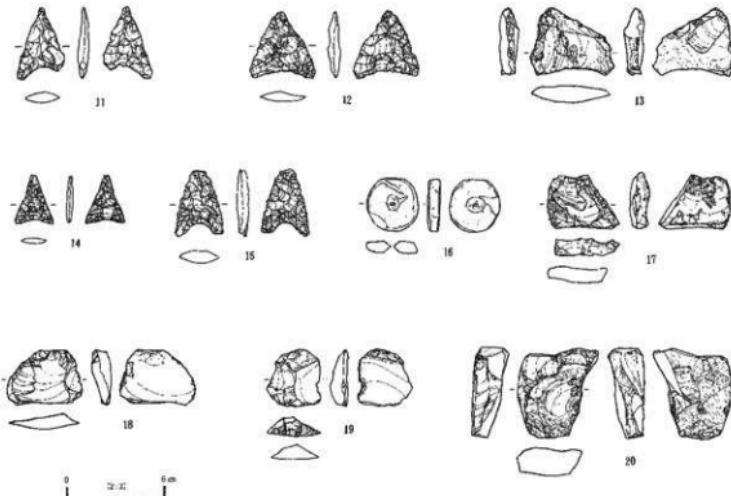
ピット群はc地区の2ヶ所で集中して検出された。1ヶ所は中央やや北寄りの土坑が集中する地点で、もう1ヶ所は中央南側の地点である。いずれも柱穴址と考えられるが不規則で、柵列や建物址を想定できるものはなかった。



第17図 地ヶ入遺跡・地ヶ入柴跡出土遺物実測図（1）

第1表 地ヶ入遺跡・地ヶ入背跡出土遺物観察表(1)

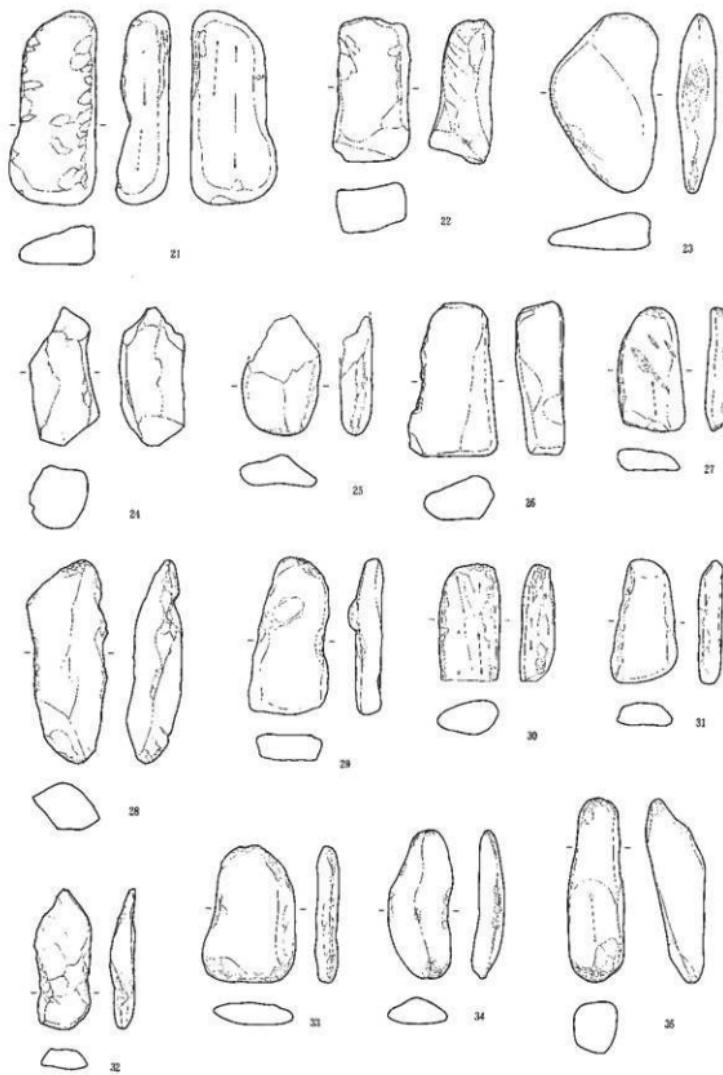
件名番号	器種	出土遺構	法量	成形と調整	備考
17-1	内耳土器	D 8	口径推定334mm 底径推定304mm 器高141mm	口クロ成形	中世、回転実測
17-2	内耳土器	Ta 7	底径推定242mm 器高現存66mm	口クロ成形	中世、回転実測
17-3	甕	脣中段	口径推定162mm	口クロロ模ナデ、胴部外面ヘラ削り、 胸部内面刷毛口調整	平安、回転実測
17-4	甕	Ta 6	口径推定144mm 器高現存61mm	口クロ成形、内面ヘラ磨き・黒色処理	平安、回転実測
17-5	内耳土器	脣東段			中世、破片実測
17-6	内耳土器	Ta 2			中世、破片実測
17-7	内耳土器	Ta 7			中世、破片実測
17-8	土師質土器	D 2	口径124mm 底径67mm 器高34mm	口クロ成形、底部回転系切	中世、完全実測
17-9	土師質土器	D 8	口径推定92mm 底径推定60mm 器高19mm	口クロ成形、回転系切	中世、回転実測
17-10	土師質土器	表採	底径推定70mm 器高現存15mm	口クロ成形、回転系切	中世、回転実測



第18図 地ヶ入遺跡・地ヶ入背跡出土遺物実測図(2)

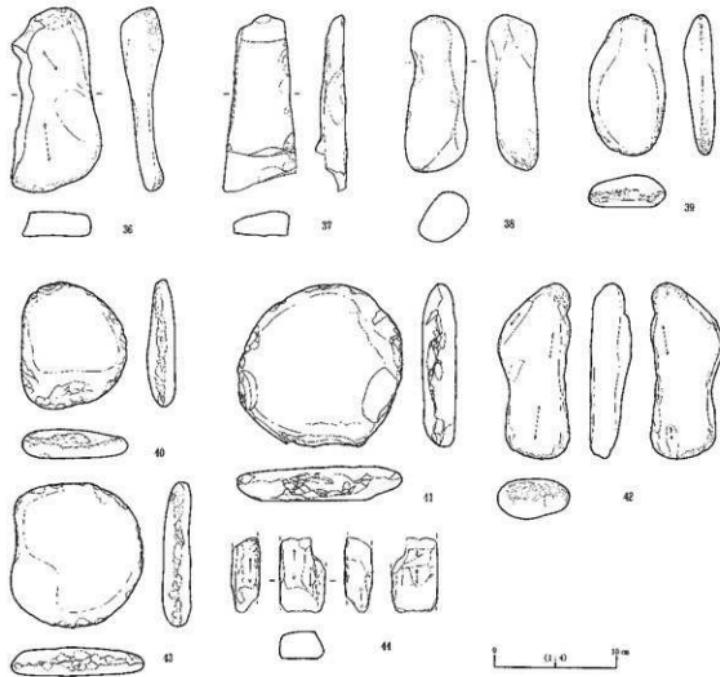
第2表 地ヶ入遺跡・地ヶ入背跡出土遺物観察表(2)

件名番号	器種	出土位置	材質	長	幅	厚	重量	備考
18-11	石鏃	2b地区	珪質頁岩	22mm	15mm	3mm	0.73g	
18-12	石鏃	2b地区	麻尾石	20mm	20mm	4mm	1.15g	
18-13	石鏃	2b地区	珪質頁岩	27mm	35mm	8mm	7.06g	木製品
18-14	石鏃	2b東段	黑曜石	15mm	12mm	2mm	0.26g	
18-15	石鏃	2b地区	黑曜石	20mm	15mm	4mm	0.9g	
18-16	有孔石製品	2b地区	矽質凝灰岩	22mm	—	5mm	2.5g	
18-17	剥片	2b地区	黑曜石	22mm	29mm	8mm	5.15g	二次加工痕有り
18-18	剥片石器	2b地区	珪質頁岩	22mm	31mm	8mm	4.42g	使用剥離痕有り
18-19	剥片石器	2b地区	珪質頁岩	23mm	22mm	7mm	3.52g	使用剥離痕有り
18-20	石核	脣東段	黑曜石	37mm	32mm	10mm	16.71g	



1 0.1 cm 10 mm

第19図 地ヶ人遺跡出土遺物実測図 (3)



第20図 地ヶ人遺跡出土遺物実測図（4）

第3表 地ヶ入遺跡・地ヶ入岩跡出土遺物観察表

標本番号	断面	出土位置	材質	重量	備考
19-21	縞物石	Ta 2	砂岩	463.5 g	敲き石と併用、成形痕有り
19-22	縞物石	Ta 2	石英粉岩	547.7 g	敲き石と併用、辺端部に敲打痕
19-23	縞物石	Ta 2	砂岩	396 g	敲き石と併用、辺端部に敲打痕
19-24	縞物石	Ta 2	黒色微斜安山岩	442.1 g	敲き石と併用、刃端部に敲打痕、成形痕
19-25	縞物石	Ta 2	溶結凝灰岩	150 g	敲き石と併用、成形痕有り
19-26	縞物石	Ta 2	石英玢岩	456.7 g	敲き石と併用、成形痕有り
19-27	縞物石	Ta 2	凝灰岩	114.1 g	敲石 繪り石と併用、砥面2面
19-28	縞物石	Ta 2	黒色微斜安山岩	464.2 g	敲き石と併用、刃端部に敲打痕
19-29	縞物石	Ta 2	安山岩	266.5 g	長辺中央に成形痕
19-30	縞物石	Ta 2	砂岩	166.1 g	敲石併用、砥面1面
19-31	縞物石	Ta 2	凝灰岩	123.6 g	敲き石と併用、刃端部に敲打痕
19-32	縞物石	Ta 2	溶結凝灰岩	101.8 g	成形痕有り
19-33	振り石	Ta 3	凝灰岩	173.7 g	辺端部に撓り面
19-34	敲き石	Ta 3	溶結凝灰岩	147.7 g	辺端部に敲打痕
19-35	縞物石	Ta 7	凝灰岩	343.4 g	敲き石と併用、刃端部に敲打痕
20-36	縞物石	Ta 7	輝石安山岩	405.6 g	敲き石と併用、刃端部に敲打痕
20-37	縞物石	Ta 7	泥質凝灰岩	203.5 g	成形痕有り
20-38	縞物石	Ta 7	砂岩	267.2 g	敲き石併用、刃端部に敲打痕
20-39	敲き石	D 1	凝灰質砂岩	188.5 g	振り石と併用、端部に敲打痕
20-40	敲き石	D 5	砂岩	256.1 g	全辺端部に敲打による剥離痕と敲打痕
20-41	敲き石	D 1	安山岩	725.7 g	全辺端部に敲打による剥離痕
20-42	砥石	D 5	凝灰岩	301 g	砥面2面、端部に敲打剥離痕
20-43	敲き石	D 8	砂岩	353.4 g	全辺端部に敲打による剥離痕
20-44	砥石	Ta 7	流紋岩	66.9 g	砥面4面



写真3 上空南方より



写真4 上空北方より



写真5 上空南西より 岱跡後方の尾根が笠原城跡



写真6 上空西方より 岱跡から駒込集落を臨む



写真7 上空東方より 後方左に五本松城・右に志賀城



写真8 上空北側より 段曲輪検出状態



写真9 上空北東より 後方中央に内山古城・内山城



写真10 上空南東より 後方右側に高瀬流山城・平尾山、中央に高相城



写真11 上空南西側より 段曲輪検出状態



写真12 上空東側より 段曲輪検出状態



写真13 地ヶ入砦跡 調査中遠景 東方より



写真14 地ヶ入砦跡 調査中近景 東より



写真15 地ヶ入砦跡 調査中遠景 西方より



写真16 地ヶ入砦跡 遠景 西方より



写真17 地ヶ入砦跡 遠景 東方より



写真18 地ヶ入砦跡 近景 東より



写真19 地ヶ入砦跡 近景 西より 中央巨石陰より五輪塔検出



写真20 地ヶ入砦跡 近景 南西より



写真21 地ヶ入岩跡 近接 北より



写真22 地ヶ入岩跡 近接 東より



写真23 地ヶ入岩跡 北東部段曲輪群 北東より



写真24 地ヶ入岩跡 東部段曲輪群 東より



写真25 地ヶ入岩跡 東斜面近景 東より



写真26 地ヶ入岩跡 東側段曲輪 南東より



写真27 地ヶ入岩跡 東側段曲輪群 東より



写真28 地ヶ入岩跡 南東部段曲輪 北東より



写真29 地ヶ入岩跡 南東部曲輪群



写真30 地ヶ入岩跡 南東部近景



写真31 地ヶ入岩跡 南東部中段段曲輪 北より



写真32 地ヶ入岩跡 東部斜面段曲輪 南より



写真33 地ヶ入岩跡 北東部中段段曲輪 南より



写真34 地ヶ入岩跡 南東部斜面段曲輪 北上より



写真35 地ヶ入岩跡 東部段曲輪 西上より



写真36 地ヶ入岩跡 南東部段曲輪 東より



写真37 地ヶ入砲跡 南東部段曲輪群 東より



写真38 地ヶ入砲跡 南東部段曲輪群 東より



写真39 地ヶ入砲跡 北東部段曲輪 南方より



写真40 地ヶ入砲跡 北中段トレンチ掘下げ状況 南より



写真41 地ヶ入砲跡 北中段北東部トレンチ掘下げ状況 当方より



写真42 地ヶ入砲跡 北中段トレンチ掘下げ状況 南より



写真43 地ヶ入砲跡 北中段 南東より



写真44 地ヶ入砲跡 北中段 南西より



写真45 地ヶ入砦跡 北中段西部トレンチ掘下げ状況 東より



写真46 地ヶ入砦跡 南東部段曲輪 東より



写真47 地ヶ入砦跡 南東部段曲輪 北西上より



写真48 地ヶ入砦跡 南西部段曲輪 北東上より



写真49 地ヶ入砦跡 西部斜面 北より



写真50 地ヶ入砦跡 南西段曲輪 南西より 中央巨岩跡より五輪塔突出



写真51 地ヶ入砦跡 西部斜面 北より



写真52 地ヶ入砦跡 南西部近景 南西より



写真53 地ヶ入砦跡 南西部 南西より



写真54 地ヶ入砦跡 南西部 南西より



写真55 地ヶ入砦跡 西部 西より



写真56 塔上部五輪塔 検出状況 東より



写真57 塔上部五輪塔 土砂礫取除き状態 東より



写真58 塔上部五輪塔 土砂礫取除き状態 西より



写真59 塔上部五輪塔 検出状況 南より



写真60 塔上部五輪塔 土砂礫取除き状態 東より



写真61 舟上部五輪塔 地輪取除き状態 南より



写真62 舟上部五輪塔 地輪取除き状態 南より



写真63 地ヶ入登頂上より地ヶ入道路を臨む 東より



写真64 地ヶ入道路作業スナップ 東より



写真65 地ヶ入道路作業スナップ 東より



写真66 地ヶ入道路全景 東より



写真67 地ヶ入道路全景 東より



写真68 地ヶ入道路作業スナップ 東より



写真69 地ヶ入御跡 上空より 上が西



写真70 第1号堅穴状遺構 南より



写真71 第2号堅穴状遺構 南西より



写真72 第2号堅穴状遺構 北壁石積 南方より



写真73 第2号堅穴状遺構 北壁石積 南より

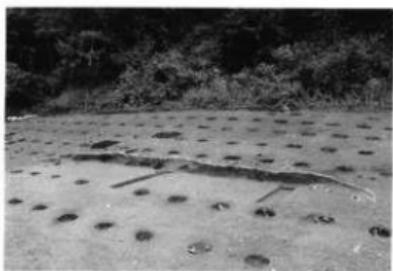


写真74 第2号堅穴状遺構 北壁石積取除き状況 南東より

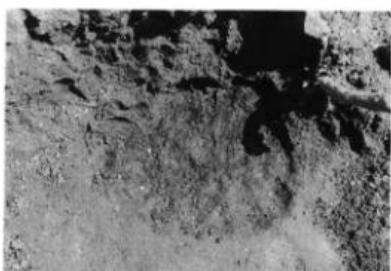


写真75 第3号堅穴状遺構 蕎状炭化物出土状況



写真76 第3号堅穴状遺構 南より



写真77 第3号堅穴状遺構 床面扁平小礫出土状況



写真78 第4号堅穴状造構 南より

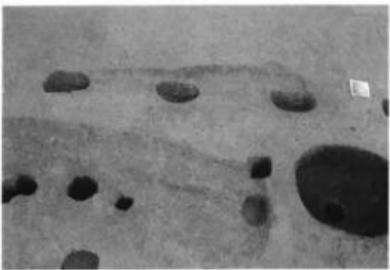


写真79 第5号堅穴状造構 南より

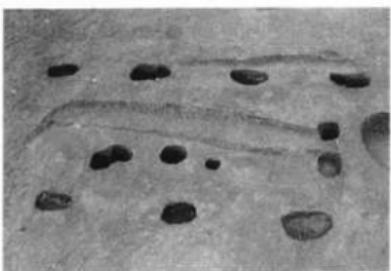


写真80 第6号堅穴状造構 南より



写真81 第7号堅穴状造構 北壁石積検出状況 南より



写真82 第7号堅穴状造構 南より



写真83 第7号堅穴状造構 東より



写真84 第1号火葬墓 罐下げる状況 東より

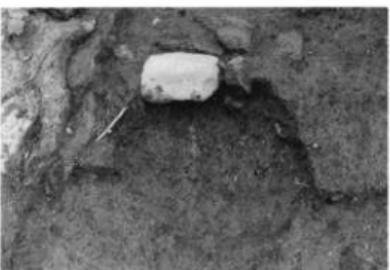


写真85 第1号火葬墓 南より



写真86 第1号土坑 耙下げ状況 南より



写真87 第1号土坑 南より

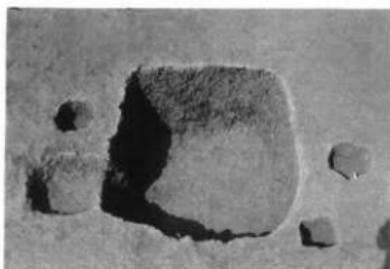


写真88 第2号土坑 南より



写真89 第2号土坑 土師質土器出土状態

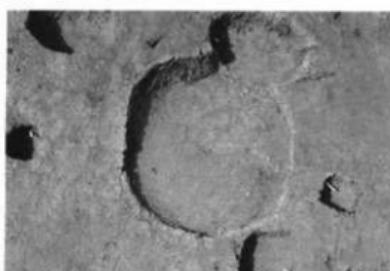


写真90 第3号土坑 南より



写真91 第4号土坑 南より

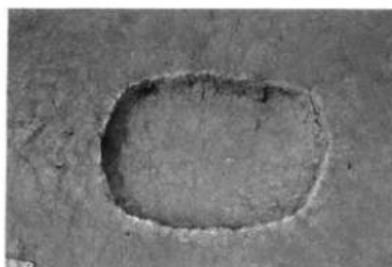


写真92 第5号土坑 南より

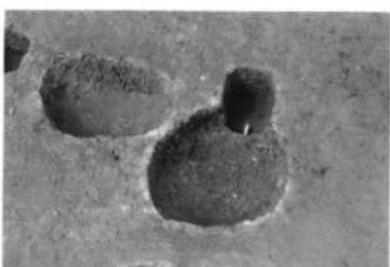


写真93 第6号土坑 南より

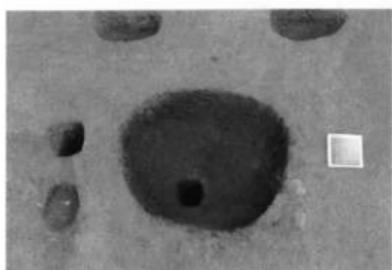


写真94 第7号土坑 南より

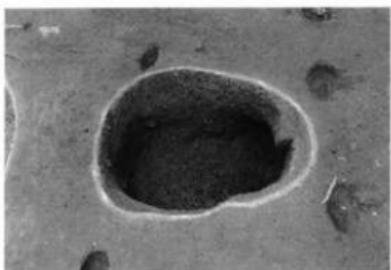


写真95 第8号土坑 東より



写真96 内耳土器 (17-2, 1:3)

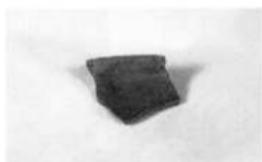


写真97 土師器甕 (17-3, 1:3)



写真98 土師器甕 (17-4, 1:3)



写真99 土師質土器 (17-8, 1:3)



写真100 土師質土器 (17-9, 1:3)



写真101 土師質土器 (17-10, 1:3)



写真102 内耳土器 (17-5, 1:3)



写真103 内耳土器 (17-6, 1:3)



写真104 内耳土器 (17-7, 1:3)

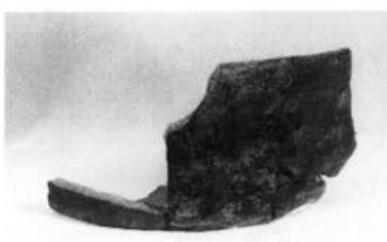


写真105 内耳土器 (17-1, 1:3)



写真106 地ヶ入道路 2b区全体写真 西より



地ヶ入窑跡上部巨石柱より出土した
五輪塔部材(地輪3基) (1:4)



(1:1)

写真107 地ヶ入道路・地ヶ入窑跡出土遺物



写真108 地ヶ入遺跡 出土石製品 (1)



写真109 地ヶ入遺跡 出土石製品 (2)



写真110 地ヶ入遺跡 出土石製品 (3)

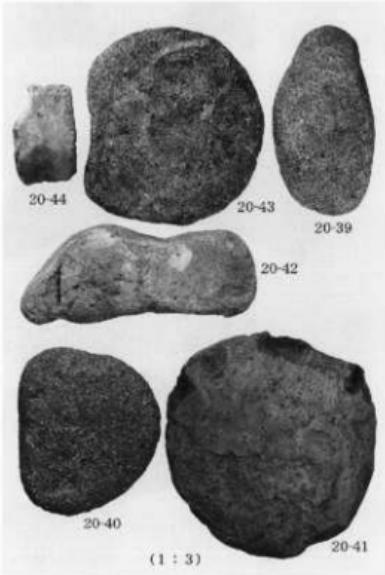


写真111 地ヶ入遺跡 出土石製品 (4)



写真112 地ヶ入道路 1 b 区 北より



写真113 地ヶ入道路 3 b 区 西より



写真114 地ヶ入道路 3 b 区 北西より



写真115 地ヶ入道路 2 a 区 時代不明石積検出状況 南より



写真116 地ヶ入道路 2 a 区 石積検出状況 南より



写真117 地ヶ入道路 2 a 区 石積検出状況 西より



写真118 地ヶ入道路 1 a 区 道祖神検出状況



写真119 地ヶ入道路 1 a 区 道祖神・石積検出状況



写真120 地ヶ入遺跡 1b区 近世石垣検出状況 南より



写真121 地ヶ入遺跡 1b区 近世石垣検出状況 南より



写真122 地ヶ入遺跡 1b区 近世石垣検出状況 南より



写真123 地ヶ入遺跡 1b区 石垣中巨石の道標（駒込）



写真124 地ヶ入遺跡 1b区 通称の刻まれた巨石 南より



写真125 地ヶ入遺跡1B区 石垣直下岩盤の轍跡（西より）



写真126 地ヶ入遺跡1b区 石組西端に石上の馬頭觀音合模出状態



写真127 地ヶ入遺跡 1B区 馬頭觀音像建立年号(弘化四年)

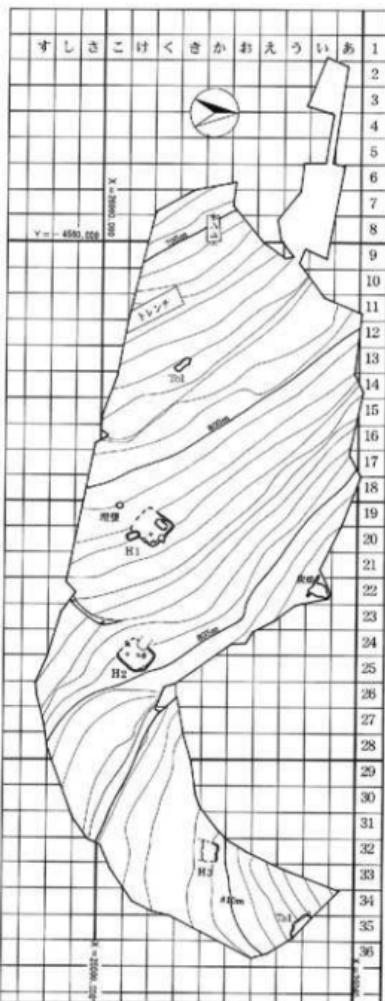
III 地ヶ入遺跡Ⅱの調査

1 調査の概要

所在地 佐久市志賀1856-1・2
調査期間 試掘調査 平成8年12月18日 発掘調査 平成9年8月28日～同年10月20日
調査面積 3,880m²
調査担当者 林 幸彦
検出遺構 平安時代
　　堅穴住居址3軒・特殊造構1基
　　绳文時代
　　土坑（理窓）1基
　　時期不明
　　堅穴状造構1基・土坑1基
平安時代
　　須恵器杯・甕、土師器环・皿・鉢・甕、
　　灰釉陶器碗、羽口、礪み物石、砾石
　　绳文時代
　　早期～中期土器、石鏃、石斧、削器



第21図 地ヶ入遺跡Ⅱの地形と調査範囲



第22図 地ヶ入遺跡Ⅱの遺構全体図 (1:750)

2 遺構と遺物

地ヶ入遺跡IIで検出された遺構は、平安時代の堅穴住居址が3軒（H1号～H13号住居址）、平安時代の特殊遺構が1基、绳文時代の土坑（埋甕）が1基、時期不明の堅穴状遺構と土坑が各1基である。

1) H1号住居址（第23図、写真128・129）

志賀川に面した山麓南西緩斜面、標高802m程の位置（第22図くけ19.20グリッド、なおグリッドは国家座標に基づく4×4mの区画で、南北列を北からあへさ、東西列を西から1～36として、例えばく19グリッドと呼ぶ）から検出された。検出面は崖難性堆積と考えられる凝灰岩丘礫を含む黒褐色土（Ⅱ層）である。時期不明の1号土坑が東壁上部を被壊し、斜面下方の南壁は確認できなかった。

住居址の残存部から知ることのできる規模は次の通りである。東西の床面で450cmを測り、南北の床面では同様に450cm程が現存する。最も残りがよい北壁の塗残高は40cmである。

床面で確認されたピットはP1～3で、東西壁にあるP1とP3が1柱穴と考えられようか。P1は直径60cm・深さ50cm程であり、P3は長軸90cm・短軸60cm・深さ40cm程の規模である。P2はP3西脇に存在し、直径40cm・深さ50cm程を測る。

床面はローム粒を多く含む黒色土（降下火山灰を含む崖難堆積土）で構築されていたが、その下位の塙方部分で、ピット状の窓み3カ所（P5～6）と長方形の土坑状掘り込み1基が確認されている。P4・5はカマド両脇に存在し、長軸50cm・深さ20cm程である。P6は長軸60cm・短軸40cm・深さ10cm程でこれらは塙方の範疇に収まるものと考えられる。

長方形を呈する土坑状の掘り込みは、底面の計測値で長軸170cm・短軸120cmを測り、深さは24cm程であり、底面は水平である。この上部にはP1が存在し、その覆土も床構築上とは異なる点があり、H1号住居址以前の土坑である可能性も指摘できる。

カマド（第24図、写真130）は、北壁中央やや東側に存在していた。主軸方位は、N-43度-Eである。これは住居址の主軸方位と同じである。煙道部、燃焼部、そしてにぶい黄褐色粘土質で構築された胴袖構部が残存していた。

煙道部底面の残存では、住居址外へ75cm程の傾斜する張り出し部が確認された。燃焼部は埴土、成化物集中範囲（団の染りつぶし範囲、以下の段も同様）で両袖間60cm、焚き口方向40cm程を測る。カマド上部と両袖位置に亜角礫が散在していた。これらの凝灰岩亜角礫は背後の山体に存在するもので、調査区北東の標高が高い地点では岩盤の状態で露出していたものである。したがって、岸鉢礫としてH1号住居址を埋めたものが存在する点が指摘できる。また、その一方で、袖部にある角礫はカマドの構築材であったことを示す。つまり、在地石材利用のカマド構築とその崖難堆積の両因による遺存状態と理解することが妥当であろう。

住居址の覆土・床面から検出した遺物（第25・26、写真131、第4・5表）には、須恵器壺・甕・上師器壺・鉢・甕、羽口・編み物石、砥石がある。

それらの検出位置は、須恵器壺（第26図1）、須恵器甕（29、30）、土師器壺・甕（3、6、8、9、12、13、19～22、26）がカマド及びその脇で、砥石（第25図9）がP1内、上師器壺（2）がP3内、砥石（11）・上師器甕（15、18・23・24・27）が床、その他のが廻土である。

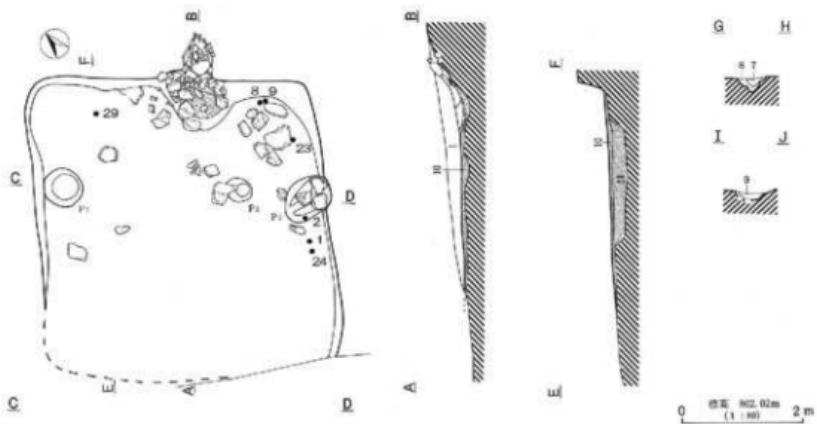
1) 須恵器壺は、底部回転糸切り後に外周ヘラ削りされたものである。第25図11の砥石としたものには、上部に直径9mmの穿孔があり、その穿孔部に向けて表裏面に良く研磨された皿状の痕跡が存在する。なお、被然による破損と推定される。

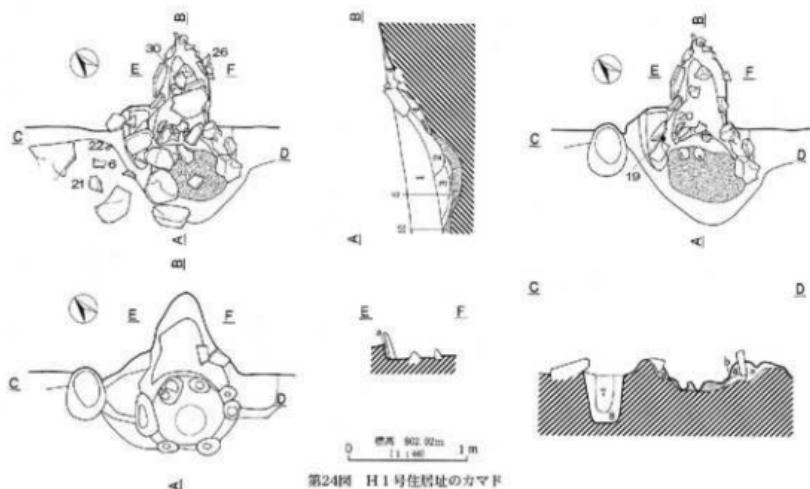
2) H2号住居址（第27図、写真132～135）

H1号住居址東側、山麓南西緩斜面、標高805m程の位置（第22図くけ24.25グリッド）から検出された。検出面は黒褐色土（Ⅱ層）であるが、H1号住居址が存在した場所以上に巨大礫が存在し、その巨大礫は住居施設として活用されていた。住居址の残存状況は、斜面下部の南壁が確認できず、西壁の南半は後世の擾乱で破壊されていた。

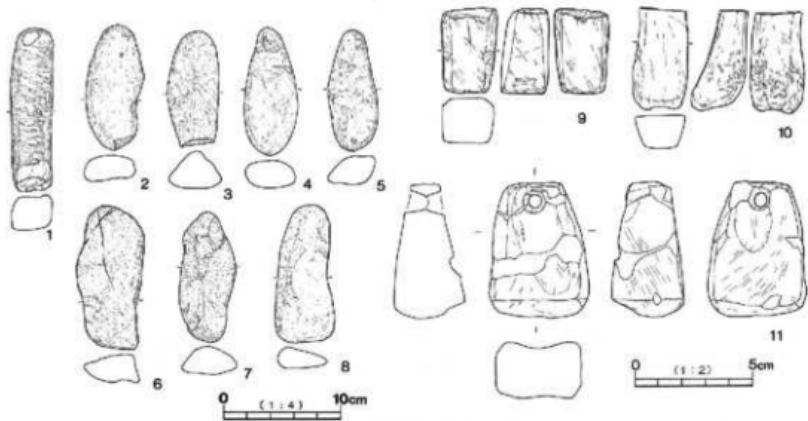
住居址残存部の規模は次の通りである。東西の床面で400cmを測る。南北ではP7の位置までの計測で450cm程である。最も残りがよい北壁の塗残高は40cmである。

ピットは床面でP1～4・6が確認され、塙方でP5・7が検出されている。東壁にあるP1が主柱穴と考えられる。P1は斜めの掘り込みで長軸50cm・深さ60cm程である。西側で対となるのはP2と塙方のP5であり、P5は10cmの深さがあるが、P2は20cmと浅く主柱穴とは断片できない。搅乱で深く破壊された西壁部分に本來の西側のP1





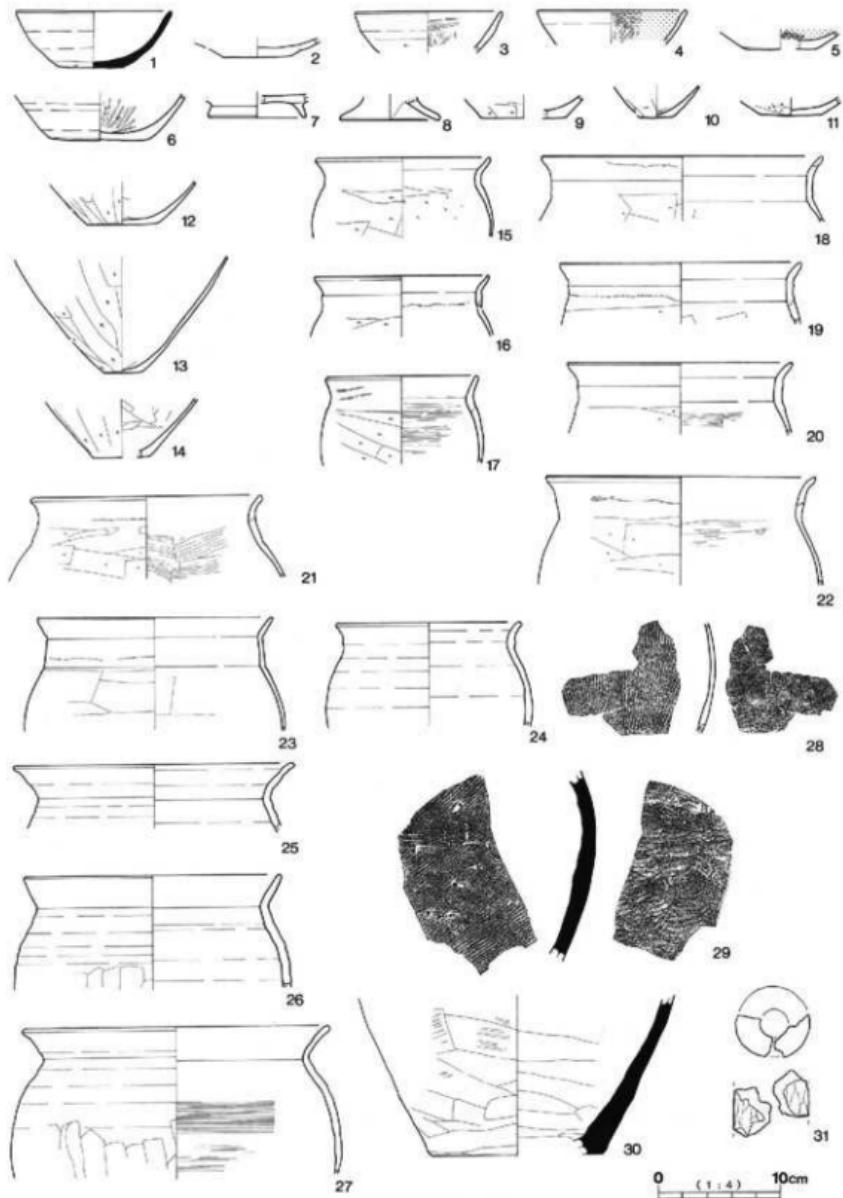
第24図 H1号住居址の方マフ



第25図 H1号住居址の刷み物石と砥石

第4表 H1号住居址の刷み物石と砥石計測表

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
1	刷み物石	安山岩	143	40	33	261.98	覆土	
2	刷み物石	安山岩	114	53	29	176.20	覆土	右側縁に挿入状加工あり
3	刷み物石	安山岩	104	47	33	261.12	覆土	
4	刷み物石	安山岩	115	49	27	144.70	覆土	
5	刷み物石	安山岩	110	46	30	139.70	覆土	
6	刷み物石	安山岩	131	63	32	156.34	覆土	
7	刷み物石	安山岩	118	51	26	152.31	覆土	
8	刷み物石	安山岩	125	55	24	162.70	覆土	
9	砥石	流紋岩	70	46	39	214.74	P1内	
10	砥石	砂岩	83	45	44	187.00	覆土	
11	砥石	凝灰岩	56	41	30	74.79	西床直	上部に穿孔あり



第26図 H1号住居址の土器

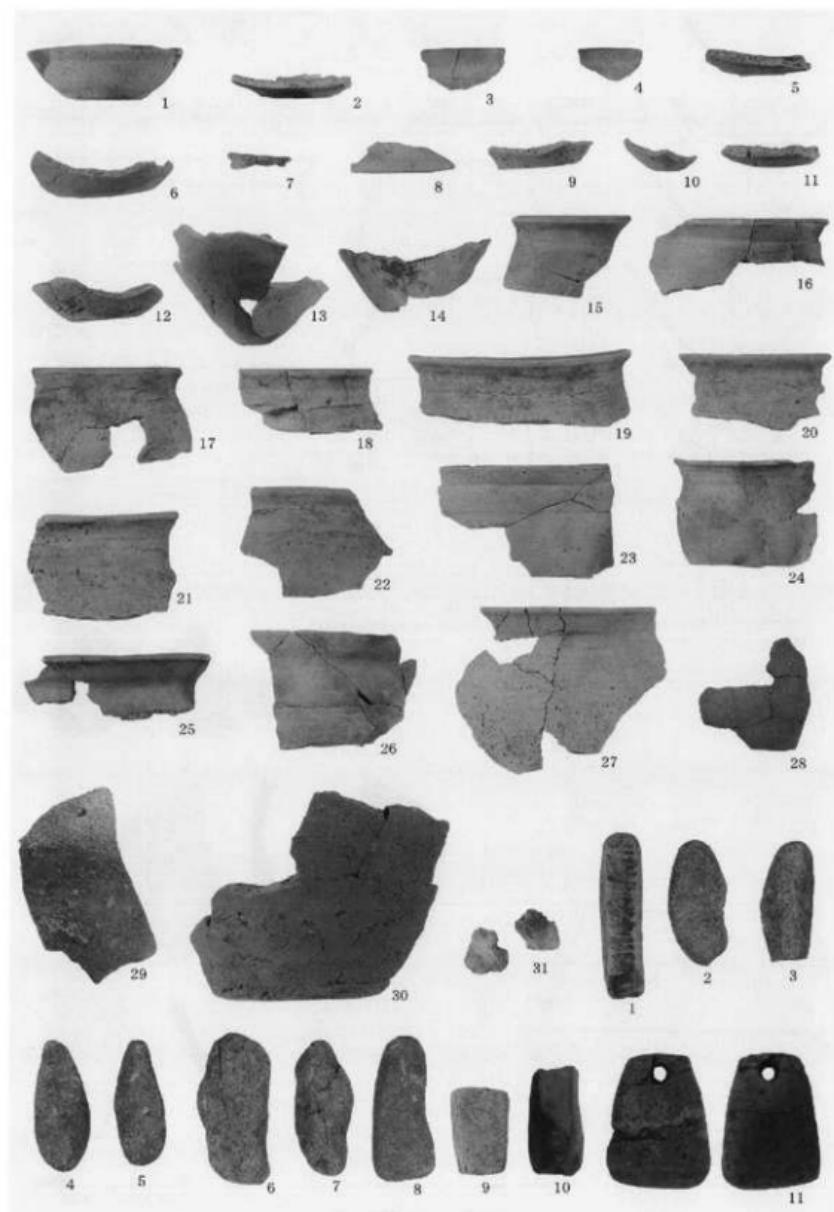


写真131 H1号住居址の土器・編み物石・硯石

第5表 111号住居址の土器観察表

番号	器種	器形	口径	底径	器高	成形・調整		出土位置
						内面	外面	
1	須恵器	环	128	53	47	内面：ナデ 外面：ロクロ 外縁：各切り一外周へラ削り		東燃協
2	土師器	环		55	*15	内面：ロクロ 外面：ロクロ一底周外回転糸切り		P3
3	土師器	环	△122		*34	内面：ミガキ 外面：ロクロ一底端下へラ削り		カマド
4	土師器	环	△122		*28	内面：ミガキ黒色処理 外面：ロクロ		覆土
5	土師器	环	△64	*15	内面：ミガキ 黑色処理 外面：ロクロ一底端外糸切り		覆土	
6	土師器	鉢	△84	*39	内面：ミガキ 外面：ロクロ一底部削込み切り一外周へラ削り		カマド右協	
7	土師器	环	△81	*20	内面：ミガキ 黑色処理 外面：リ高台		覆土	
8	土師器	脚	△83	*19	内面：ナデ 外面：ヨコナデ		カマド右協	
9	土師器	鉢	△72	*19	内面：ロクロ 外面：ヘラ削り		カマド右協	
10	土師器	要		28	*27	内面：ミガキ 外面：ヘラ削り		覆土
11	土師器	要		△52	*16	内面：ナデ 外面：ヘラ削り		覆土
12	土師器	要		59	*35	内面：ヘラナデ 外面：ヘラ削り		カマド
13	土師器	要		32	*94	内面：ヘラナデ 外面：ヘラ削り		カマド
14	土師器	要	△47	*47	内面：ヘラナデ 外面：ヘラ削り		覆土	
15	土師器	要	△144		*65	内面：ヘラナデ ナデ 外面：ヘラ削り		床
16	土師器	要	△144		*50	内面：ナデ 外面：ヘラ削り		壠方
17	土師器	要	△126		*72	内面：ハケ付 外面：ヘラ削り		覆土
18	土師器	要	△232		*53	内面：ナデ 外面：ヘラ削り		床
19	土師器	要	△199		*51	内面：ナデ 外面：ヘラ削り		カマド内
20	土師器	要	△186		*60	内面：ハケ付 外面：ヘラ削り		カマド内
21	土師器	要	△190		*67	内面：ハケ付 外面：ヘラ削り		カマド左協
22	土師器	要	△222		*88	内面：ヘラナデ 外面：ヘラ削り		カマド左協
23	土師器	要	△193		*93	内面：ヘラナデ 外面：ヘラ削り		東燃協
24	土師器	要	△152		*86	内面：ロクロ 外面：ロクロ		東燃協
25	土師器	要	△230		*56	内面：ロクロ 外面：ロクロ		覆土
26	土師器	要	△211		*93	内面：ロクロ 外面：ロクロ一底端中央へラ削り		煙道
27	土師器	要	△252		*123	内面：カキ口 外面：ロクロ一底部小辺へラ削り		床
28	土師器	要				内面：ハケ付 外面：ハケ付		覆土
29	須恵器	要				内面：カキ口 外面：カキ口		カマド左協
30	須恵器	要	△140	*130		内面：ヘラナデ 外面：和田口へラ削り ナデ		煙道
	土製品	羽口	△62	△24		外面：ナデ		
31	土製品	羽口						

柱穴が存在していたと考えられようか。P 6は直径35cm・深さ30cm程の規模で出入り口部の施設に開わろうか、その南側壙方で確認されたP 7は直径35cm・深さ15cmである。住居址内部にあるP 3・4は直径30cm・深さ20cm程である。

H 2号住居址内の中央やや南西にある巨大扁平壠は住居址構築以前の地山に存在していたものである。また、カマド右協・東壁際にある扁平な大型礎2枚は床面上に据えられた状態で検出されたものである。

H 12号住居址のカマド(第27図下・写真133～135)は、北壁中央やや東側に存在していた。主軸方位は、N-E度である。煙道部、燃焼部、肉袖が残存していた。

煙道部は住居址が建設された場所を反映して、極めて特徴的なあり方を示していた。住居址内に巨大な扁平壠があることを上記したが、カマド構築部にはそれにも増した巨礎が存在していた。その巨礎側面は半円形に抉られ、大型角礎を配して構築されたと想定される天井部と共に煙道部として活用された(写真133・134)。また、両袖部もその基部に埋め込まれていた板状礎の立石状況から、在地の亜角礎を心材として構築されていたことが何れか、それを覆う褐色粘質土が一部陥没された。

燃焼部は両袖間40cm、焚き口から煙道部まで70cm程を測る。また、東西に並ぶ支脚石2個が残存していた(写真135)。長さ20～30cmの棒状亜角礎を用いたもので、東西支脚石の間隔は30cm程である。

住居址のカマド・床面から検出した遺物(第28図、写真136、第6表)には、土師器環・甕がある。また、10の須恵器耳片が覆土中から検出されている。

土師器環・甕(2～9)がカマドの燃焼部を中心として廃棄されていた上層群である(第27図)。また、1の土師器環が東壁側の大形扁平礎で検出されている。

1・2の土師器環と5の高台が付く土師器環は内面黒色処理されたものである。2の底部は回転ヘラ削り、5の底部は回転糸切りの状態にある。8・9の土師器甕は口縁部がコの字状に外反する。

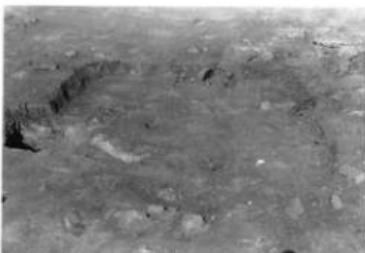
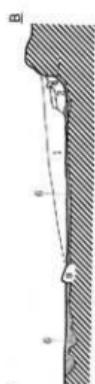
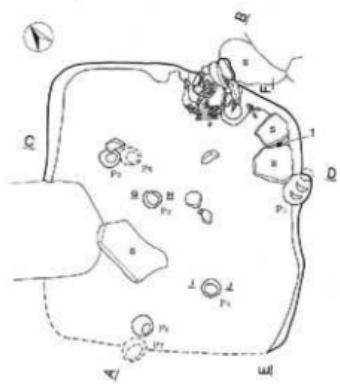


写真132 H2号住居址

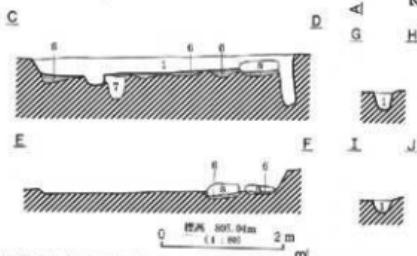
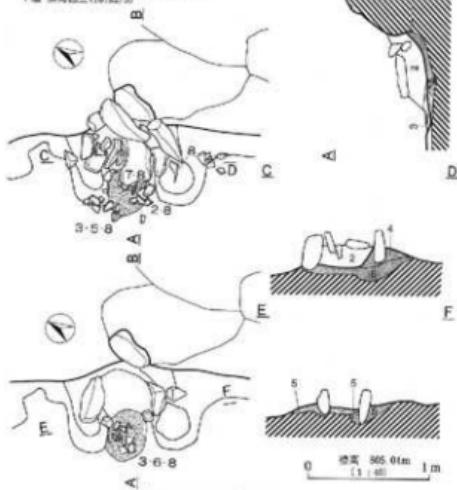


写真133 H2号住居址のカマド

- 1層 黒褐色土(0/0132/2) 斑塊色土ゴック・炭化物を多く含む。
- 2層 黑褐色土(0/0132/2) 炭化物を含む。
- 3層 灰褐色土(0/0132/3) 灰化物・燒土粒を含む。
- 4層 水質土(0/0132/4)
- 5層 水質土(0/0132/5)
- 6層 灰褐色土(0/0132/6) 灰化物を含む。
- 7層 黑褐色土(0/0132/7)



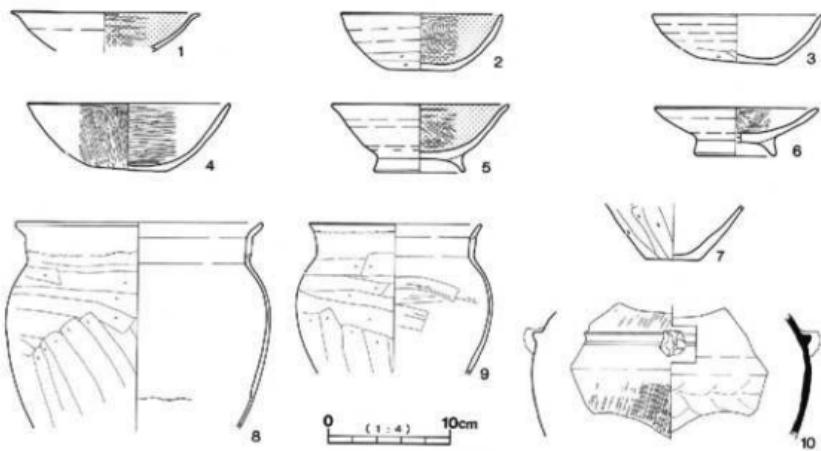
第27図 H2号住居址



写真134 H2号住居址のカマド



写真135 H2号住居址のカマド



第28図 H2号住居址の土器

第6表 H2号住居址の土器観察表

番号	器種	器形	口径	底径	器高	成形・調整		出土位置
						内面	外面	
1	土師器	壺	△156		*32	内面：ヘラミガキ 色無處理 外面：ロクロ		東壁脇
2	土師器	壺	134	55	46	内面：ヘラミガキ 色無處理 外面：ロクロ → 鹿革刮削ヘラ削り	カマド	
3	土師器	壺	△142	63	39	内面：ナデ 外面：ロクロ → 鹿革刮削ヘラ削り	カマド	
4	土師器	壺	△168	61	55	内面：ミガキ 外面：ロクロ → 鹿革刮削ヘラ削り → ヒガキ	カマド	
5	土師器	壺	△147	76	56	内面：ミガキ 外面：ロクロ → 鹿革刮削ヘラ削り → 高台	カマド	
6	土師器	壺	△135	67	*40	内面：ミガキ 外面：ロクロ → 片高台	カマド	
7	土師器	甕		44	*46	内面：ナデ 外面：ヘラ削り	カマド	
8	土師器	甕	△204		*169	内面：ナデ 外面：ヘラ削り	カマド	
9	土師器	甕	142		*124	内面：ヘラ削りナデ 外面：ヘラ削り	カマド脇	
10	須恵器	四耳甕				内面：あて具縁 ナデ→ロクロ エモ：焼き目ナデ→必須頭輪引掛け→ロクロ	腰十	

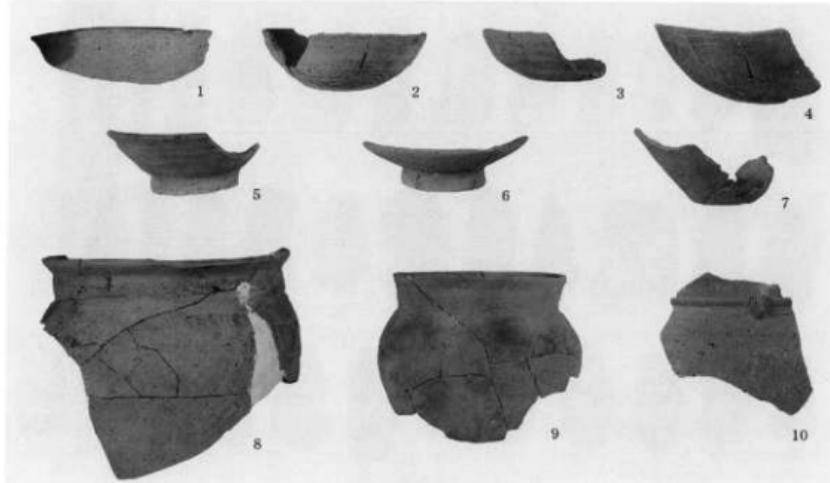


写真136 H2号住居址の土器

3) 口3号住居址 (第29圖、写真138~140)

H 3号住居址は、調査区東側の山麓南西緩斜面で最も標高の高い810m付近（第22図か32グリッド）から検出された。検出面は黒褐色土（II層）であるが、巨大礫の存在は更に顯著で住居北方の山体は岩盤が露出している状況にあった。住居残存状況は、北壁を主体とする西北壁のコーナー、カマド燃焼部の確認に止まった。

住居址残存部では、北壁で240cmを測る程度であり、その壁残高は20cm程度である。また、東壁とカマド燃焼部では260cm程度を測り、それが概ね住居規模を示すようだ。

ピットの確認は床面のP-1のみである。P-1は直角40cm・深さ15cm程であり主柱穴とは考えられない。

カマド(第27図右)は、焼土炭化物集中部からなる約40×30cm程の燃焼部が確認された。その東西には亜角礫が埋め込まれた状態で確認されているため、それらは両袖部の構築位置を示していると考えることも可能である。するとカマドの構築位置は東壁においても、北壁とのコーナーに存在していたことを示す。

住居址の床面から検出された遺物（第31・32図、写真137・141、第7・8表）には、土師器壊・甕・縞み物石がある。

縞み物石は北壁脇の直径50cm程の範囲に集中して造営されたものである。その集中部には、棒状の安山岩円礫を主体とする36個の縞み物石が並べられ、内面黒色処理・底部回転ヘラ削りからなる1の土師器杯がその東脇に残されていた。(第30図)。

縞模物石の大きさは、長さ108~74mm・平均88mm、幅72~27mm・平均42mm、厚さ41~16mm・平均24mm、重さ344~41g・平均86gである。ほとんどが自然縞の形状を利用したものであるが、第32図5・21の右側縞には敲打により抉入部が形成されていた。

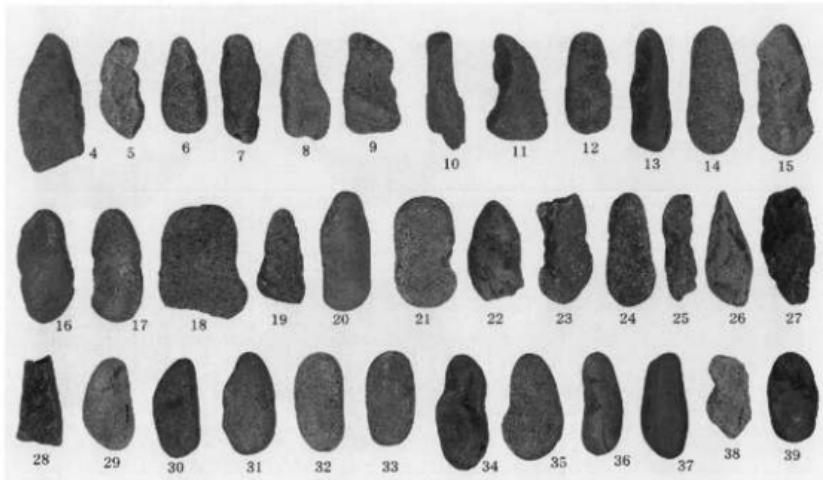
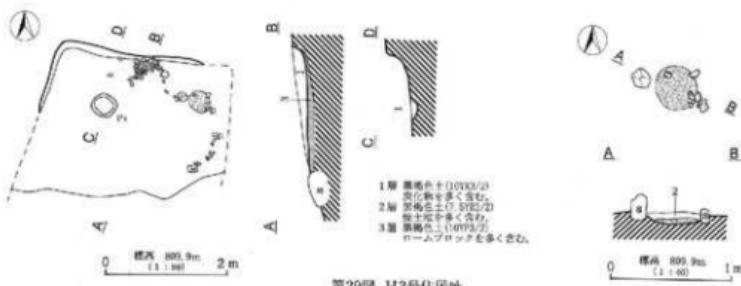


写真137 H3号住居址の縞み物石



第29図 H3号住居址

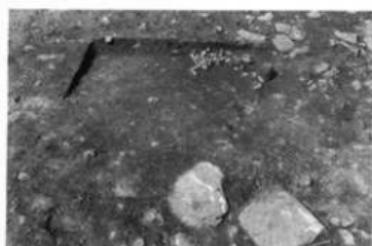
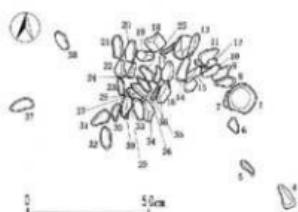


写真138 H3号住居址



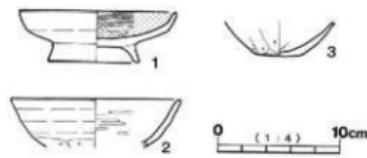
写真139 H3号住居址堆方



第30図 H3号住居址編み物石検出状況



写真140 H3号住居址編み物石検出状況



第31図 H3号住居址の土器

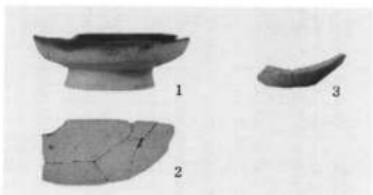
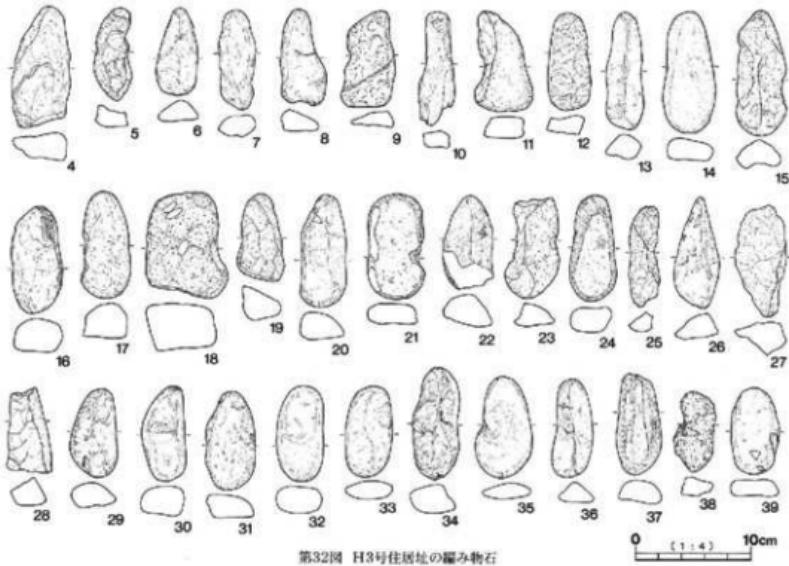


写真141 H3号住居址の土器

第7表 H3号住居址の土器観察表

番号	器種	器形	口径	底厚	器高	成形・調整	出土位置
1	上縁器	环	130	75	42	内面:ミガキ 黒色處理 外面:ロクロ→底盛右斜面へ割り→付蓋台	床
2	上縁器	环	△140	■40	■40	内面:ミガキ 外面:ロクロ→全体下半へ割り	床
3	上縁器	碗	△39	■28	内面:ヘラナチ 外面:ヘラ削り	床	



第32図 H3号住居址の編み物石

第32表 H3号住居址の編み物石計測表

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
4	編み物石	安山岩	105	51	27	142.67	北壁中央集中部	
5	編み物石	安山岩	80	33	19	47.67	北壁中央集中部	抉入部剥離
6	編み物石	安山岩	75	36	20	51.03	北壁中央集中部	
7	編み物石	安山岩	90	32	19	57.83	北壁中央集中部	
8	編み物石	安山岩	83	40	23	60.14	北壁中央集中部	
9	編み物石	安山岩	83	47	17	51.22	北壁中央集中部	
10	編み物石	溶結凝灰岩	98	31	17	60.27	北壁中央集中部	
11	編み物石	安山岩	86	51	19	93.88	北壁中央集中部	
12	編み物石	安山岩	84	38	20	62.03	北壁中央集中部	
13	編み物石	安山岩	101	33	22	71.57	北壁中央集中部	
14	編み物石	安山岩	104	46	26	99.06	北壁中央集中部	
15	編み物石	安山岩	108	45	29	109.47	北壁中央集中部	
16	編み物石	安山岩	96	44	31	124.80	北壁中央集中部	
17	編み物石	安山岩	93	42	31	124.03	北壁中央集中部	
18	編み物石	安山岩	92	72	41	344.33	北壁中央集中部	
19	編み物石	安山岩	76	41	30	84.65	北壁中央集中部	
20	編み物石	安山岩	97	40	28	118.64	北壁中央集中部	
21	編み物石	安山岩	91	50	18	108.67	北壁中央集中部	
22	編み物石	安山岩	82	44	31	96.11	北壁中央集中部	
23	編み物石	安山岩	92	46	23	75.69	北壁中央集中部	
24	編み物石	安山岩	87	27	20	40.54	北壁中央集中部	
25	編み物石	安山岩	97	41	30	102.78	北壁中央集中部	分割標
26	編み物石	安山岩	97	40	25	67.76	北壁中央集中部	
27	編み物石	安山岩	96	45	29	89.00	北壁中央集中部	
28	編み物石	安山岩	74	39	25	62.84	北壁中央集中部	
29	編み物石	安山岩	76	41	24	59.33	北壁中央集中部	
30	編み物石	安山岩	82	39	28	90.91	北壁中央集中部	
31	編み物石	安山岩	85	43	21	59.33	北壁中央集中部	
32	編み物石	安山岩	83	41	25	76.07	北壁中央集中部	
33	編み物石	安山岩	78	41	16	52.28	北壁中央集中部	
34	編み物石	安山岩	100	42	25	90.13	北壁中央集中部	
35	編み物石	安山岩	88	49	17	73.42	北壁中央集中部	
36	編み物石	安山岩	85	36	21	61.07	北壁中央集中部	
37	編み物石	安山岩	87	39	22	86.25	北壁中央集中部	
38	編み物石	安山岩	74	37	16	43.66	北壁中央集中部	
39	編み物石	安山岩	74	42	20	62.30	北壁中央集中部	

4) 1号特殊造構 (第35図、写真143~144)

1号特殊造構は、調査区西側に位置する山麓南西緩斜面の標高798m付近 (第22図き13グリッド) から検出された。検出面は黒褐色土 (II層) であるが、含まれる巨礫の存在は減少している。

特殊造構としたのは、造構の性格が判断できなかつたためであるが、形状は北西にある円形の掘り込み部と南東にある円形の掘り込み部が連結したひょうたん型を呈し、北西にある掘り込み部に焼土の集中範囲が存在していた。

斜面に直交する北西一南東の長軸長は上場で300cm程を測る。南北への2カ所の張り出しは100cm程である。深さは焼土部分で15cm程、その北側の最も深い部分で25cm程である。また、南東部の掘り込みに接する南西部に直径30cm、深さ25cmのピットが存在する。

焼土は70×45cm程の規模にある。焼土部分にある礫と南東部の掘り込みにある亜角礫は、土器と共に廃棄された状況にある (堆積時に流入した可能性もある)。

その廃棄された土器 (第36図、写真145、第9表) には、灰釉陶器壺 (1)、須恵器壺 (2~4)・甕 (10)、土師器壺・甕 (5~9) がある。4の底部回転糸切りで高台が付く須恵器壺と10の須恵器甕が焼土部分、3の須恵器壺・5の高台の付く土師器壺・8の脚部のある土師器甕が南西の掘り込み部、6の底部回転糸切りで高台が付く土師器壺がピット、1の灰釉陶器壺・2の須恵器壺・7の土師器壺・9の土師器甕が掘り込み部の覆土から検出されている。

5) 1号堅穴状造構 (第33図)

1号堅穴造構は、調査区東端の最も標高の高い山麓南緩斜面 (第22図う35グリッド) で検出されている。標高は812mで、検出面は巨礫を多量に含む黒褐色土 (II層) である。

調査区外に造構が広がるため、造構の全容は知れずその性格は確定できなかつた。調査した部分では、斜面方向の長軸長430cm・深さ55cmを測る。

検出された遺物は、覆土から流紋岩製砥石の破片のみであり、時期や性格を決定する遺物は検出されなかつた。

6) 1号土坑 (第34図、写真142)

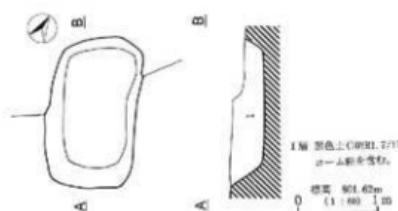
1号土坑は、標高802m付近の南西緩斜面 (第22図け20グリッド) にあり、H1号住居址の東壁を破壊している。

長方形の形状を呈し、斜面に直交する底面の長軸長は150cm、短軸長は80cm程である。深さは、40cmを測り底面は水平である。なお、写真142の底面にある大型亜角礫は、土坑が掘り込まれた第II層中の礫である。

H1号住居址を破壊していることから、それよりも新しい時期の造構であるが、時期を決定できる遺物は検出されていない。



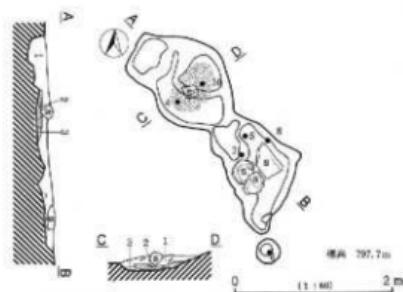
第33図 1号堅穴造構



第34図 1号土坑



写真142 1号土坑



1種 塗膜色土(197.7m) 黒土色・ローム質・炭化物を含む。

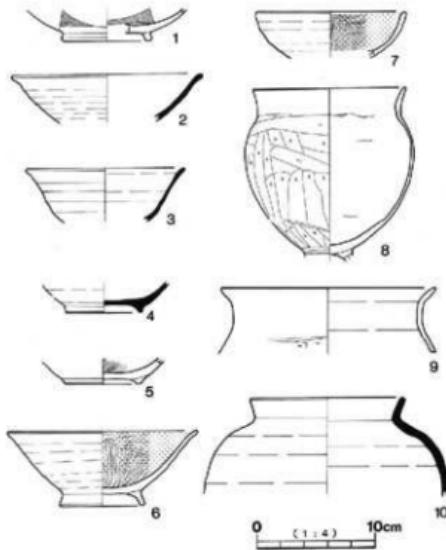
2種 暗褐色土(197.7m) 黒土色を含む。

3種 暗褐色土(197.7m) 黒土色を含む。

第35図 1号特殊遺構



写真143 1号特殊遺構出土状況



第36図 1号特殊遺構の上器



写真144 1号特殊遺構

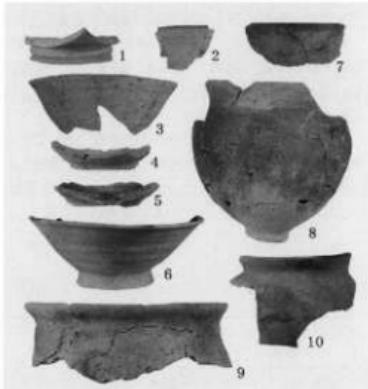


写真145 1号特殊遺構の土器

第9表 1号特殊遺構の土器観察表

番号	器種	器形	口径	底径	器高	成形・調整		備考
						内面	外面	
1	灰釉陶器	环		△77	*27	ロクロ・輪郭	ロクロ→付高台→輪郭	褐土
2	須恵器	环	△162		*41	ロクロ	ロクロ	褐土
3	須恵器	环	△136		*46	ロクロ	ロクロ	南西部
4	須恵器	环		66	*36	ロクロ	ロクロ→乳頭・輪郭切り→付高台	褐土
5	十輪器	环			*22	内面：ミガキ無施用	外面：ロクロ→既成ナメ→付高台	南西部
6	十輪器	环	162	73	6	内面：ミガキ無施用	外面：ロクロ→底脚3輪・輪郭切り→付高台	ピット
7	十輪器	环	△129		7	内面：ミガキ無施用	外面：ロクロ	褐土
8	十輪器	甕	△130		*146	内面：ヘラナメ	ナメ 外面：ヘラ削り→脚貼り付け	南西部
9	十輪器	甕	△183		*57	内面：ロクロ	外面：ロクロ	褐土
10	須恵器	甕	△132		*84	内面：ロクロ	外面：ロクロ	褐土

7) 墓塚 (第37図、写真146)

H1号住居址の南側に位置する標高800.5mの南西緩斜面 (第22図c 19グリッド) で検出されている。掘り込み面は縄文時代の包含層である黒褐色土 (II層) からその下の褐色土 (III層) に及ぶ。塚方は斜面に直交する長軸長で50cm・短軸長で40cm程、深さ20~30cmである。

埋め込まれた土器は、胴部以下を欠く縄文中期後半の深鉢であり、地元の「佐久系」土器として検討できる資料である。

8) 縄文時代の土器と石器 (第38・39、写真147・148、第10表)

地ヶ入遺跡の地層は斜面上部と下部では大きく異なっていた。最上部は山体の岩盤露出地となり、斜面下部の調査区西南端 (第22図標高795m、か8グリッドトレンチ) では、表土・耕作土 (I層) 、黒褐色土 (II層) 、褐色土 (III層) 、黄褐色ローム層 (IV層) の堆積がみられた。IV層のローム層は、降下火山灰をベースにするが、亜角礫を含んでおり崖錐性の堆積である。III層は降下火山灰と黒褐色土が混在する崖錐性堆積である。

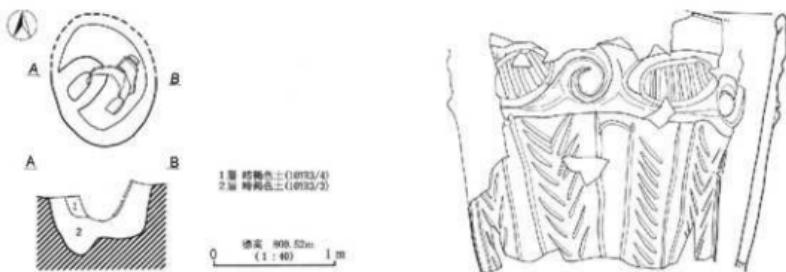
II層が縄文時代の包含層で、平安時代の遺構検出面であった。その検出面で説明したように、斜面上部では地点的に異なる大型亜角礫を含む繰り返された崖錐堆積をII層中に認めることが出来る。それはIII層においても同様である。

II層中から検出された縄文土器には、第38図1~7の縄文時代早期横円押型土器、8~15の縄文時代前期後半の土器群、理窯にみた中期後半の土器群がみられた。

II層と住居址覆土から検出された縄文時代の石器には、第39図1~10の石鏃、11の石器未製品と考えられる資料、12の削器、13の石核、14の剥片、15の黒曜石原石、16~19の打製石斧 (16・18・19の刃部における網目は使用痕跡と考えられる著しい磨耗部) があった。

用いられた石材は打製石斧が在地石材である溶結凝灰岩の板状扁平礫で、石鏃に黒曜石・チャートが用いられ、そして石鏃・削器・剥片・石核に珪質頁岩が用いられていた。

この珪質頁岩は遺跡近隣の志賀川で採取できることが判明し、「駒込頁岩」と命名したものである。



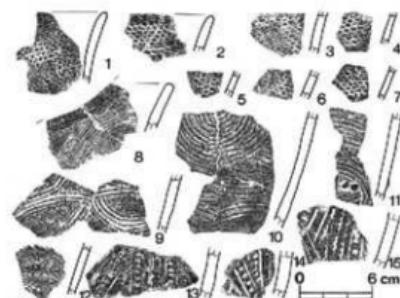
第37図 縄文時代中期の堆積



写真146 縄文時代中期の堆積

「駒込頁岩」の詳細は、天神小根遺跡の報告書を参照して頂くとして、地ヶ入遺跡で述べておかなければいけないことは、II層の縄文時代の石器。さらにはⅢ層中の石器として採取された石片に「駒込頁岩」の原石が多量に含まれていた点である。それらは原石と言っても剥片状や石器状（エオリス）の小形資料を主体とし、全体としては珪質頁岩よりは凝灰質な頁岩を主体とするが、その検出層が堆錐性堆積層であることから、背後の山体に「駒込頁岩」の岩脈が存在することを示唆する。

「駒込頁岩」の岩脈は、駒込地方の志賀川に沿って分布する駒込層において、数ヵ所の地点的な存在が想定され、その事例の一つとして地ヶ入遺跡の原石産状は重要である。今回は、それらの資料は提示できなかったが、今後の組織的な原産地調査の結果に含めたい。



第38図 縄文時代早期・前期の土器

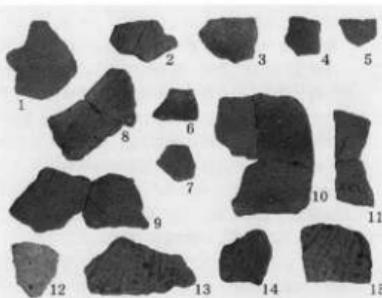


写真147 縄文時代早期・前期の土器

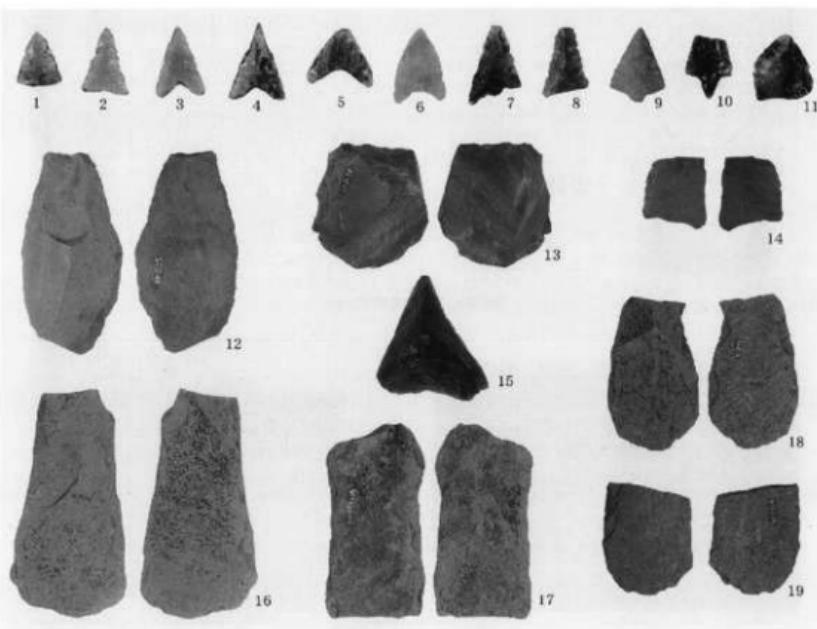
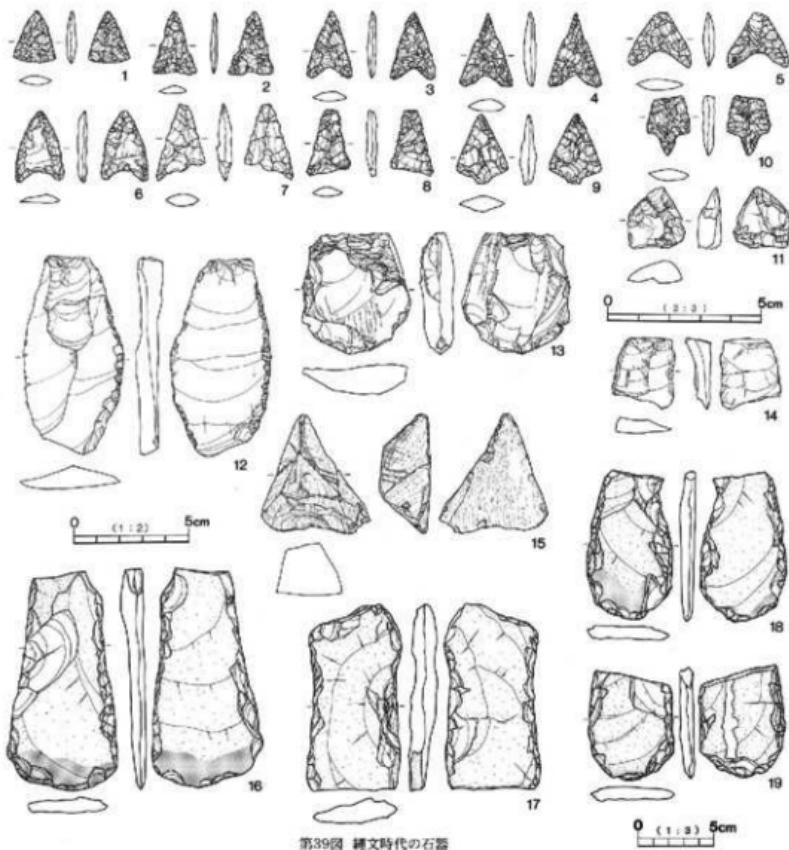


写真148 縄文時代の石器



第39図 總文時代の石器

第10表 總文時代の石器計測表

番号	圓種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位図	備考
1	石鏃	黒曜石	17	13	3	0.63	こ24	
2	石鏃	黒曜石	20	14	2	0.53	く23	
3	石鏃	黒曜石	22	14	3	0.72	か21	
4	石鏃	黒曜石	23	17	4	0.91	H2薄土	
5	石鏃	黒曜石	18	20	4	0.84	け26	
6	石鏃	チャート	23	15	3	1.12	き23	
7	石鏃	チャート	25	16	5	1.39	か21	
8	石鏃	チャート	21	14	4	0.91	か8	
9	石鏃	珪質頁岩	22	17	5	1.22	き24	
10	石鏃	黒曜石	20	14	4	0.92	き22	
11	石鏃未製品	黒曜石	20	18	8	2.41	H2薄土	
12	削器	珪質頁岩	84	42	11	30.96	こ20	
13	石核	珪質頁岩	52	47	14	41.40	け25	
14	剥片	珪質頁岩	31	27	11	7.30	け23	
15	原石	黒曜石	51	47	22	48.02	112薄土	
16	打製石斧	溶結凝灰岩	141	71	15	142.19	き23	刀部磨耗
17	打製石斧	溶結凝灰岩	120	59	18	143.57	<23	刀部磨耗
18	打製石斧	溶結凝灰岩	96	55	10	6.24	き23	刀部磨耗
19	打製石斧	溶結凝灰岩	71	56	9	50.21	き21	刀部磨耗

IV 畳石遺跡の調査

1 調査の概要

所在地	長野県佐久市志賀1759-1
調査期間	平成11年8月3日～9月3日
調査面積	約5,000m ²
調査担当者	小林眞寿・出澤 力
検出遺構	平安時代 積穴住居址2軒
	時間不明 土坑1基、柱穴1基、溝址2基
検出遺物	平安時代 土師器壺・甕

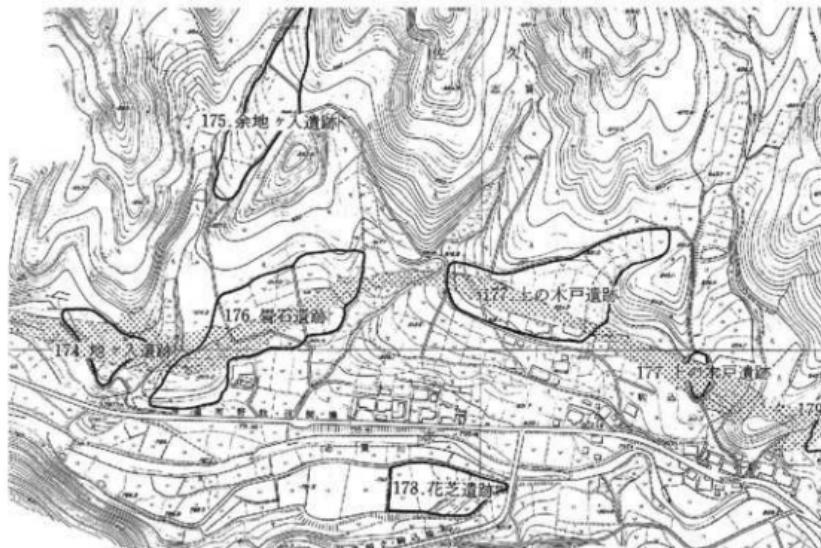
2 遺構と遺物

畳石遺跡は地ヶ入遺跡IIの谷を挟んだ東側に存在する。志賀川に面した南東方向の緩斜面であり、その土層堆積はH1号住居址が検出された山腹では崖縫性堆積にあるが、溝址が検出された緩斜面では安定した降下火山灰の堆積が広範囲に存在していた(写真151・152)。その緩斜面の広がりは地ヶ入遺跡IIを凌いでいたが、検出された平安時代の住居址は、その残存部が2軒確認されただけである。その位置は、調査区東端の傾斜が最も緩い場所であり、一定の集落が存在したと想定するならば、調査区外北側に広がる緩斜面がその候補地となろうか(第40・43図)。

1) H1号住居址 (第44図、写真153・154)

調査区東端でカマドとピット6ヵ所が確認できただけである。調査区外に遺構の北半部が広がるが、調査した範囲においても住居址の壁面は残存していなかった。

カマドは、板状の地山垂角礫を構築材として埋め込んだ両袖部と、その間にある施土・炭化物集中として確認された燃



第40図 畳石遺跡の地形と調査区 (1 : 2,500)

焼部である。その主軸方位はN-75度-Eであり、東カマドと言える。南北にある袖石の長さはそれぞれ50cm程であり両袖間は幅50cm程である。その燃焼部で確認された焼土・炭化物集中範囲の規模は焚き口方向50cm、両袖間40cm程である。

ピットは6カ所確認されたが、それぞれに浅く、上柱穴と確定できるものは存在しなかった。調査区の壁に掛かるP6はカマドに対する位置にあり、入り口部施設と住居址規模を想定させようか。するとP4~5が住居址には伴わない可能性が指摘でき、現状ではピットの性格を確定できないという表現が妥当である。

カマド範囲から第45図（写真155）に示した上師器壺・甕が検出されている。1は内面黒色処理・底部回転糸切りの土師器壺、2は内面黒色処理・底部ヘラ削りの上師器壺で、3は口縁部カコの字状に外反する土師器甕である。

2) H2号住居址（第46図、写真156）

住居址として報告するが、カマド燃焼部とピットが1基確認できただけである。

検出位置はH1号住居址が検出された調査区東部の緩斜面下方である（第43図）。

カマド燃焼部と捉えた焼土範囲は、長軸70cm、短軸50cm程の規模である。その南東にあるピットは直径25cm・深さ10cm程の小形のものである。長軸方向をカマドの方向と想定すれば、主軸方位はN-60度-E程が計測でき、北東方向のカマド位置が想定される。

検出された遺物はその帰属に問題があるが、焼土周辺部で第47図（写真157）に図示した土師器甕底部が得られている。

3) 1号土坑（第41図、写真149）

H2号住居址の南東の斜面下方に位置する。造構の南半分は調査区外にあり完掘していない。

確認できた長軸長で100cm・深さ7cmである。時期を特定できる遺物は検出されていない。

4) 1号ピット（第42図、写真150）

住居址・上坑が検出された東部調査区の斜面上方に位置する（第43図）。

直径30cm・深さ10cmの単独ピットである。

5) 溝址（第43図、写真151・152）

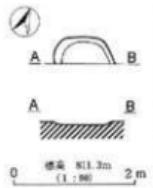
調査区中央から西側の緩斜面に直交する南北に配列された2条の溝址が確認されている。

北側にあるM2は北側の調査区外に延びており、確認された範囲では、長さ21m、幅100cm、深さ26cm程である。

南側下方にあるM1はM2から3mの間隔を空けた位置にあり、溝底面の標高では約1m下がった位置にある。調査区中央から西方部へ延びるがその途中で確認できなかった範囲がある。西南部は収束状況にあるが北東部は調査区外へ延びている。幅100cm、深さ30cm程の規模にある。

溝址からは時期を特定できる遺物は確認されていない。近世の耕作によるものとも考えられるが、その性格は不明である。

なお、調査区の広範囲において浅間山起源・八ヶ岳起源の降下火山灰による堆積層（ローム層）が存在していたため、ローム層中の旧石器時代遺物の確認を目的としたトレンチによる試掘調査を実施したが、遺物は確認されなかつた。また、谷を挟んだ東側の緩斜面に位置する上の木戸遺跡の試掘調査では、当初予想していた平安時代集落の存在は確認されなかつたが、ローム層上部（浅間板鼻褐色輕石群よりは上部、浅間人窪沢第2輕石拵散下部）から、珪質頁岩（「納込頁岩」）の石核1点が検出された（報告は天神小根遺跡報告書に掲載したので参照されたい）。



第41図 1号土坑



写真149 1号土坑



第42図 1号ビット

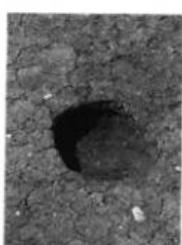
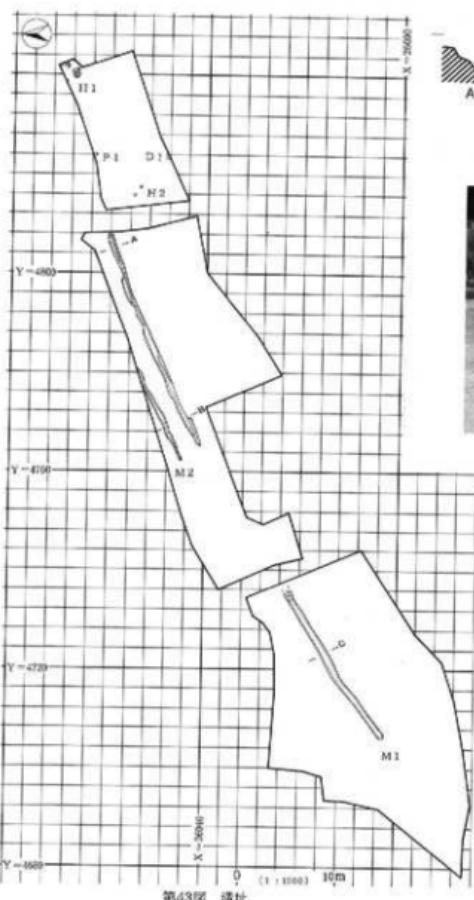


写真150 1号ビット



第43図 溝址

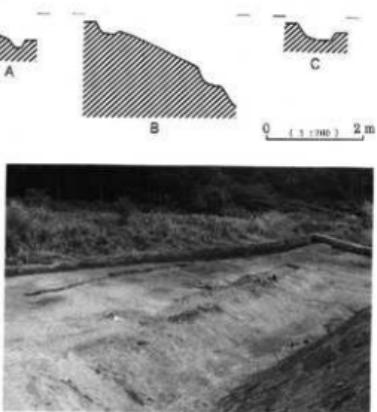


写真151 溝址



写真152 溝址

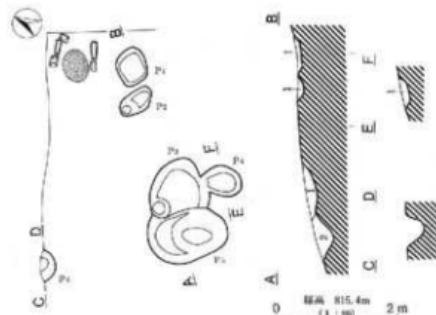


写真153 H1号住居址

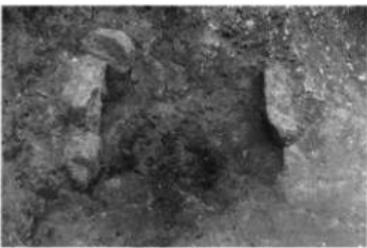
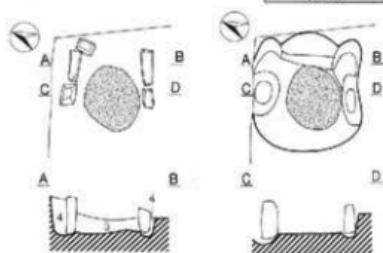


写真154 H1号住居址のカマド

1番 にじい黄褐色(10YR5/3)
黒褐色、灰褐色等々。ヨリムを多く含む。
2番 にじい灰褐色(10YR6/3)
3番 1面に灰化物を多く含む。4番 深黄褐色土層(10YR8/4)粘土。

第44図 H1号住居址



第45図 H1号住居址の土器

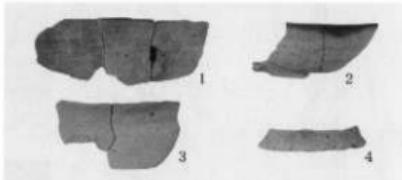
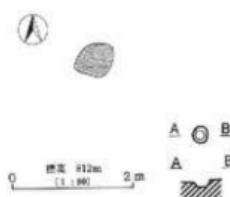


写真155 H1号住居址の土器



第46図 H2号住居址

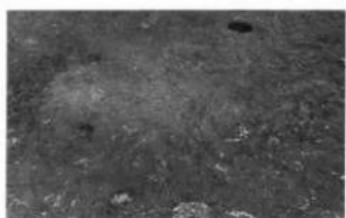
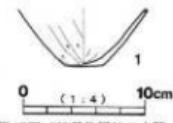


写真156 H2号住居址



第47図 H2号住居址の土器



写真157 H2号住居址の土器

第11表 H1・H2号住居址土器調査表

通構	番号	器種	器形	口径	底径	器高	成形・調整	出土位置
H1	1	土師器	环	△156	△75	△52	内面：ミガキ三色施理 外面：ロクロ→丸鉢の輪切り	カマド
H1	2	土師器	环	△124	△44	44	内面：ミガキ黑色施理 外面：ロクロ→丸鉢の輪切り	カマド
H1	3	土師器	甕	△122		△47	内面：口縁ナギ 体部とガモ 外面：口縁ナギ 体部ハラ削り	カマド
H1	4	土師器	脚		△80	△14	内面：ナギ 外面：ナギ	カマド
H2	1	土師器	甕		△31	△47	内面：ヘラナギ 外面：ヘラ削り	

V 午房沢遺跡の調査

1 調査の概要

所在地 長野県佐久市志賀1420-1・2
調査期間 平成13年5月29日～6月2日
調査面積 660m²
調査担当者 須藤隆司

2 縄文時代の遺物

午房沢遺跡は志賀川の支流であるゴボウ沢で形成された標高830m前後の谷中緩斜面に存在し、表面採集された遺物から平安時代の遺跡として登録されていた。今回の調査範囲では遺構は検出されなかったが、土師器片数点、縄文時代の土器・石器が検出された。

土層の堆積状態は、表土下が地山である岩片混じり黄褐色粘土層となる地点が調査区の大半を占めたが、調査区東側に黒色土の堆積からなる幅4～11mの浅い谷部が確認された。

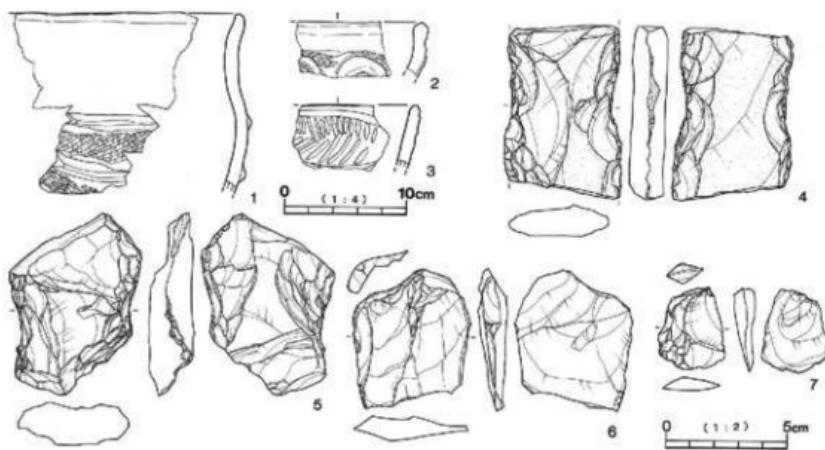
検出された遺物はその黒色土を出土層準としていることから、谷部への廃棄、あるいは水性作用による二次堆積遺物と考えられる。第49図1～3は検出された十数片の縄文土器における中期後半の口縁部破片である。4・5は在地石材である溶結凝灰岩製の打製石斧である。共に欠損品であるが、5の右側縁下部には折れ面に対する再生加工が施されている。6・7は志賀川で採取されたガラス質黒色安山岩を検討させる剥片である。



第49図 午房沢遺跡の地形と調査区



写真158 午房沢遺跡の黒色土堆積



第49図 牛房沢遺跡の土器と石器

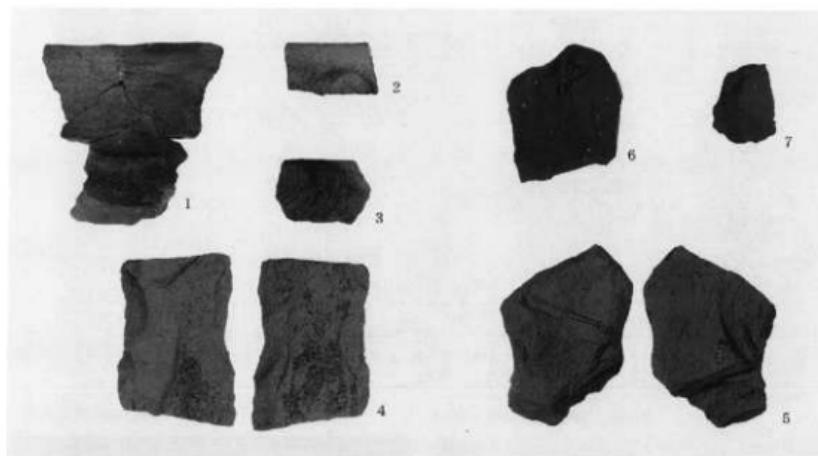


写真159 牛房沢遺跡の土器と石器

第12表 牛房沢遺跡の石器計測表

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
4	打製石斧	溶結凝灰岩	71	49	14	78.11	黒色土	
5	打製石斧	溶結凝灰岩	75	55	18	74.03	黒色土	再生剥離あり
6	剥片	ガラス質黒色安山岩	53	48	9	29.10	黒色土	
7	剥片	ガラス質黒色安山岩	34	28	8	6.40	黒色土	

VI 西駒込遺跡の調査

1 調査の概要

所在地 長野県佐久市志賀1324-3
調査期間 平成17年6月13日～6月17日
調査面積 430m²
調査担当者 福藤隆司

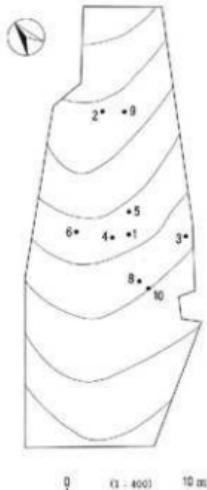
2 縄文時代の遺物

西駒込遺跡は、谷部に面した南西緩斜面で表面採取された遺物から平安時代の遺跡として周知されていた。今回の調査地点は、その遺跡範囲に隣接した標高851m前後の尾根頂部緩斜面である。

調査地点は周知の遺跡範囲ではなかったが、尾根頂部で降下火山灰層の厚い堆積が確認されたため、旧石器時代の遺物確認を目的とした試掘調査を実施した。



第50図 西駒込遺跡の地形ト调查区



第51図 西駒込遺跡の石器分布



写真160 西駒込遺跡の地形（北東から）



写真161 西駒込遺跡の石器分布（南西から）

その結果、ローム層上面から石器が検出されたため、尾根頂部平坦面の表土層を取り除きローム上面の遺物検出作業を実施した。その過程で、黒曜石の石器が検出されたため、ローム層上面に縄文時代の包含層である漸移的な地層が存在することが判明した。

その縄文時代の遺物包含層である褐色土から検出された遺物は9点であり、それらの分布は第51図に示す尾根頂部における散漫な分布である。なお、第52図7の剥片は表土層で採取した遺物である。

第52図1～4は黒曜石を石材とするもので石縫ないしその未製品と考えられる資料である。1は周辺加工で整形された小形石器で左脚部が欠損している。2はいさか大脛であるが、先端部形成を意図した資料として評価した。3は表裏面に原縫面が残ることから、素材は剥片状の原石と考えられる。先端部の整形はあるが基部整形はない。4は製作途上の破損を想定した理解であるが、左側縁に弧状の刃部があり、右側縁を使用による欠損と捉えると削器（あるいは石匙）であった可能性が指摘できる。

5は在地石材である緑色凝灰岩を石材とする削器である。右側縁に大小の重複する調整加工で刃部が形成されている。また、裏面左側縁には大きな剥離面があり、大きさ・厚さから考えると石核利用を意図した剥離とも理解される。

6～8・10は「駆込頁岩」を石材とする剥片である。6は駆込頁岩でも特に珪質な頁岩に相当する。剥離時に打点から縦割れを起こした剥片であるが、右側縁の鋭利な縁辺に連続する微小剥離痕が観察される。7も6と同様に珪質な頁岩である。節理面状の縫面からなる打面が広く残された縦長剥片で、鋭利な右側縁に連続する微小剥離痕が観察される。

10も剥離時に打点から縦割れを起こした剥片である。この駆込頁岩は6・8に比較するとやや珪質な頁岩である。そして、8の横長剥片はさらに珪質な頁岩で、表面の光沢が無く、ざらついた印象を受ける頁岩である。

9はガラス質黒色安山岩を石材とする横長剥片が剥離時に、打点から縦割れした資料と考えられる。風化が激しく明確に判断できないが、下縁には使用痕跡と推定される微小剥離痕が存在する。ガラス質黒色安山岩は、午房沢遺跡の剥片で一部触れたが、八幡山産・香坂川産以外に志賀川で採取可能な八重久保産が存在し、上記、駆込頁岩の採取場所が志賀川であるとすると、9にもその可能性が指摘できる。表面の磨耗度は高く、少なくとも河川（香坂川か志賀川）で採取された資料と考えられる。

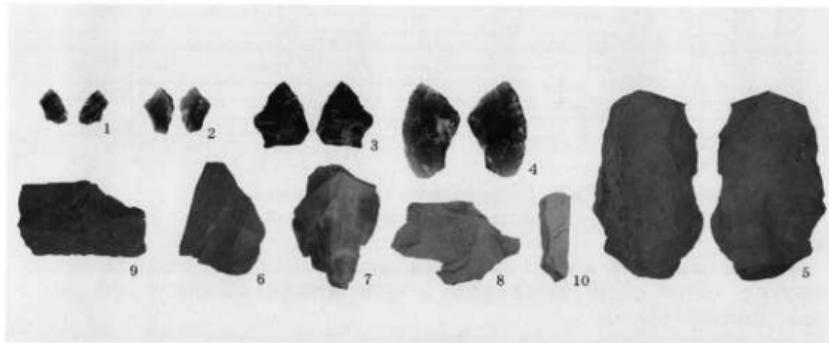
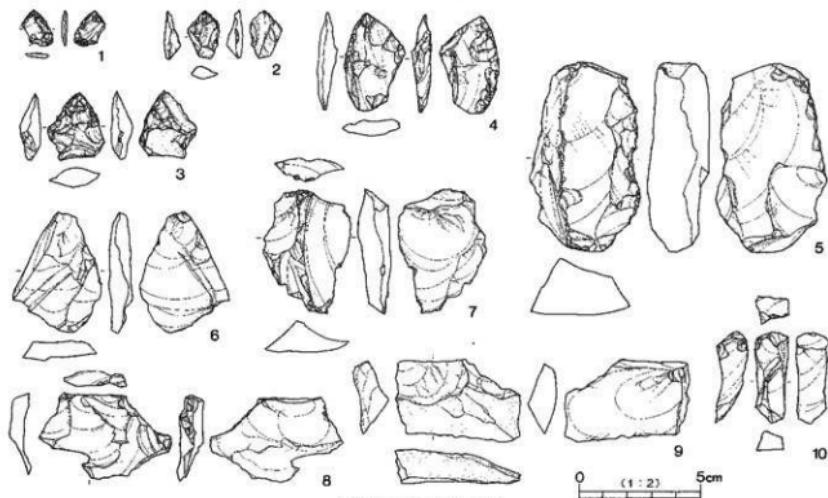


写真162 西駆込遺跡の石器



第52図 西駒込遺跡の石器

第13表 西駒込遺跡の石器計測表

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
1	石器	黒曜石	14.5	*13	2	0.30		
2	石器	黒曜石	20	13	6	1.02		未製品
3	石器	黒曜石	28	23	8	4.29		未製品
4	石器	黒曜石	40	24	6	5.98		
5	削器	緑色燧灰岩	78	46	23	89.96		
6	剥片	珪質頁岩	50	*37	8	12.73		駒込頁岩
7	剥片	珪質頁岩	51	36	12	17.17		駒込頁岩
8	剥片	珪質頁岩	35	54	7	11.01		駒込頁岩
9	剥片	ガラス質粘色安山岩	31	*51	12	23.39		
10	剥片	珪質頁岩	37	*14	13	5.78		駒込頁岩

なお、以上に報告した遺跡の他に実施した試掘調査結果を以下にまとめておきたい。

疊石遺跡と上の木戸遺跡の間にある小河川が流れる低地部（第40図）は水性堆積層を中心として、遺構・遺物は確認できなかった。

上の木戸遺跡（第40図）では、前述通り平安時代の遺構・遺物は検出されなかつたが、旧石器時代の石核1点が検出された。そのため、ローム層上面の調査を目的的に、ローム下層の遺物確認をトレンチ調査を行つたが、上記1点以外の遺物は確認できなかつた。

上の木戸遺跡の谷部（第40図の2つに区分された遺跡範囲の中間）は、降下火山灰層まで1m近い黒ボク上の堆積が存在したが、遺構・遺物は検出されなかつた。

上の木戸遺跡と牛房沢遺跡の間にある尾根頂部（第48図）では降下火山灰の厚い堆積層が存在していたため、重機トレンチによる旧石器確認調査を実施したが、遺物は確認されなかつた。

牛房沢遺跡と西駒込遺跡の間にある尾根先端部（第50図）は斜面地のため降下火山灰層ではなく表土下に岩盤が露出する状況にあり、西駒込遺跡東方斜面（第50図）も同様であった。

西駒込遺跡と大神小根遺跡の間にある低地部（第50図）は、水性堆積を基本として、遺構・遺物は存在していなかつた。

大神小根遺跡は、平成12・13年の試掘調査で発見された旧石器時代（網石刃石器群）と縄文時代（前期）の遺跡である。詳細報告は、佐久市埋蔵文化財調査報告書第136集である。

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第137集

地ヶ入遺跡 地ヶ入砦跡
豊石遺跡 午房沢遺跡 西駒込遺跡

県単地方道路交付金事業（下仁田浅科線佐久市駒込）関連遺跡発掘報告書Ⅱ

2006年3月24日

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056
文化財課
〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5953
TEL 0267-68-7321
印刷 キクハラインク有限会社
